

# Fate Seeker

issue 2

制服学部メイドさん学科 TYPE-MOON 分科会  
『睨月舎』 Presents



## 【CoverWorks】

九十球 歩鳥 (Special thanks)

## 【Illustrations】

火星田レイ子 『紅く笑う』

羽音るな 『胸次第』

PIN・X たちばな 緋瀬らい いちめどー 皇征介

## 【CONTENTS】

紅く笑う .....	阿羅本 景	3 p
なればそんなでもないですよ .....	緋瀬 らい	29 P
イラスト .....	PIN・X	30 p
イラスト .....	たちばな	32 p
胸次第 .....	阿羅本 景	33 p
イラスト .....	皇 征介	41 p
イラスト .....	いちめどー	42 p
編集後記 .....	阿羅本 景	43 p

# 缸く笑う

阿羅本 景  
イラスト 火星田レイ子

——器の底は、常に乾いている

青銅の杯に赤い葡萄酒を注ぐ。器の底は輝が入り、じわりじわりと濡れだしていく。掲げ、矯めつ眇めつ眺めてもその輝は見つけることは出来ない。だが確実に葡萄酒は漏れていく。やがて血を思わせる酒は零れて卓を汚し、器には激が赤く汚らわしく残る。何度も、革袋から葡萄酒を注ぐ、そうしてもそれはただ卓に零れて板と床を汚して酔わせ、空気を耐え難く儲えさせ、そして器の底には屑のような激が堪り続ける。

それを酔眼で見つめるのならない。でも、私は決して酔うことは出来ない。

なれば、この身は確かならざる時分に砕かれ、酔うなどという幸福は許されないのだから。手にした杯は渴き、唇を葡萄酒は潤すことはない。汚れた卓に正気のまま座り、油と酒と汗の入り交じった空気はいっそ息など出来ぬ方が良いと思う。

指を伸ばし、杯の底を触れる。ぬるり、とこびり付く酒の激。

どこかで誰かが嘲笑う。これがお前だ、魔女め、貴様は甘美な毒の中に混じった激にすぎない。濾され、そして捨てられていく。酔い、毒される者はお前があったことすら忘れようとする。お前がするのは、せめてその酒を酔に腐らせて酔客の眉を擽めさせることではないのか——

嘲笑われる私は、フードの中で瞳を隠す。

そうだ、そうなのだ。所詮そのような私なのだ、人並みの幸福というのがどんなものなのかも知らず、人並みに不幸になると言うことの苦しさも知らない。世界を滅ぼすことは出来ない。世界を救うほどの力もない。ただ流され、敵を生み騙し、探り、毒を混ぜ、殺し、呪い、そして逃げ——

「……………」

どれほど繰り返したことが、私の中の毒を舌の上に乗せることは。

それは苦く、渋く、腐り、きつく酸の味がした。ああ、激たる私が毒の味を知るとは異なる事、甘美な人の幸福を吸ってその臭さに嘔吐するのならば余人は承伏しよう。だが、私の

毒を私が甘く飲み干さねば、誰が飲むというのか——

石の階段を下る。この奥津城の至聖所、三石の祭壇の前に。

床は流れた血で汚れている。サンダル裏に、まだ粘るような汚れを感じていた。ああ、この異教の神殿は器だ、そしてそれは渴き、斯くの如く血の激に汚れている。どれほどこの上を血で塗ったのか？だが、昔日の世界で私が殺し、濡れた血に比べればさしたる量ではない。

この異教の神殿、聖杯の地を奪って早幾日。

言峰綺礼という不遜な神父を容易く打ち倒し、この場を抑えた。その後にはあの愉快な坊やと小娘が攻め至ったが、笑ってしまうほどに無力であった。坊やのセイバーは私が僕として奪い、さらなる傑作はあの小娘だ——目の前でサーヴァントに裏切られる。これほどの悲喜劇は見たことがない。嗤った、嗤いのあまりおかしくなりそうなほどに。

刹那、私が身を酔わせる絶望と挫折、それをあの小娘は露わにしていた。

そして、あの少年少女の最期も哀れなものであった。

サーヴァントを奪われ、徒手空拳で再びこの神殿に寄せてきた。何か策があるのかと思つて半ば楽しみにしたのに、あまりにも他愛ない結末であった。

坊やは赤い騎士に倒され——

小娘はその左腕を宗一郎様に弾き飛ばされた。

そして、それをあの聖緑と至白の騎士王に見せつけた。

そう、私が嬲りものにするセイバーに。令呪と呪縛で縛り、心を侵したあの聖女に、哀れな彼女のかつてのマスターの成れの果てを見せつけてやった。

「……く」

唇が歪み、喉が鳴る。ああ、嬉しい、私は酔えぬと思ったが、かくのごとく酔うことが出来るのだと、それは血と呪いで彩られ、身を蝕む虫食いのような快感胸に穴を開け、みしゃみしゃと囁られる。それが心地良い、病のような快感だった。



「……………ふ。いいわ、あの方の考えることは私には分かりかねます。でも、そのご意志には反していない筈」

セイバーを前にして呟くが、それを彼女に聞かせるためではない。いや、彼女がそれを聞いて、理解するだけの知能が残っているかどうかも怪しいもの。令呪で戒め呪縛で侵したセイバーは、身は清らかであっても心は穢れている。いや、身を汚し、心が清らかなままで狂わせるほうが良かったのか、兎に角——この赤いドレスが似合う、淫婦となっていた。

彼女の腕を戒める、紅銀の呪縛を凝視する。ちりちりと音を立てるのは、これなのか。祭壇に腕を吊られ、脚を投げ出すセイバー。ハイヒールの靴も赤く染まっていた。それはこの床の血の上で踊り、血だまりで染めたように紅い。

「は……………はは……………」

さあ……………悦楽しましよ、セイバー。美しい娼婦よ

あなたの初穂を摘むのがこの私。あなたの躰がどれほどに色を求め、苦しむのかをこの目で取めて上げましょ。そして人々があの至聖清純な騎士王が淫婦と変わり果ててしまった様を嘆くのを聞いて上げましょ。ああ、あの坊やを生かしておけば面白かったかもしれない、あの坊やは胸を引き裂き、臟腑を吐き出し、腰を振ってはしたくない快感を得るあなたを絶望の内に罵ることでしょう。

そう、あの小娘も片腕を失った淫らな侍女にして上げてもよかつたかしら。戒められたセイバーを見ているだけで、無数の快樂が浮かぶ。これほど美しく、完成され、そして淫らな処女を前にすれば性は同じでも喜びはいくらでも——

「——avolker」

呪縛の戒めを解いた。力無く吊られていた彼女の躰が崩れる——

「！」

目の前で、華が舞った。

ロードスの島の深紅の薔薇が、海からの西風で巻き上げられるように——  
紅いドレスが翻る様は、多弁の薔薇が踊るようだった。私はそれに一瞬、見惚れてしまっ

た。何故、私に薔薇の舞う幻影が見えるのか、何故——あの島の薔薇は美の女神の化身であり、今私が目しているのもまた神の御裾の巻き起こす敵いがたい力の悪戯なのか。

「あ……………」

薔薇の花は、消え去っていた。

いや、深紅の薔薇の花ではない。あれはセイバーで、目の前から消えた。いざ彼女が身を駆る疾さはこの魔術師の瞳で捕らえられるものではない。逃げた、それはない、最早彼女は私に届いた筈なのに、どうして私の目を惑わす必要がある？

「——はあつ」

耳元で感じる、息。それは殺気の発露ではない。

フード越しに染みこんでくるような息であった。この衣も一つの魔術であり、西風の神の怒りですら通すことは出来ない。なのに、その息の音は私の耳まで染みこんでくる。明らかに異質で異常な現象、それに身を練ることを忘れる私。

油断ではない。

細心の注意を例え払っていたとしても、セイバーの挙動を阻めるはずはないのだから。

「あ……………つ！」

胸元に回る手。細い少女の腕は、まるでダイダロスが鋼を打って作り上げた人形のように、私を捉えて放さない。真後ろから抱きつく少女の腕には、紅く染まった絹の手袋を着けている。それが、まるで胸から流した私の血に染まったようで、不吉だった。

絹は湿り、どろりとしている。光沢が水を思わせる。手触りのその滑らかさが得体の知れない忌まわしさに満ちていた。

振り返ろうとすると、フードが落ちた。ぱさりと布地が零れ、顔にこの地下聖所の空気を感じる。肌にとわりつく湿気と、決して変わることはない温度ゆえの息苦しき、そして華の——薔薇の香りが、濃厚に私を襲う。どこかにそれはぐずぐずと熟れた陰部の生臭さを秘めていた。

「——お待ちしておりました、我がマスター」

鼻の奥が、つうんと痛くなる。

言葉に耳にしたのに、それを感じるの鼻の奥だ。私の耳をすり抜ける声が、鼓膜を超してこんな奥まで響いている。抱きつくのはセイバー、声色はセイバーのそれ、だが、今まで私が聞いたことがない響きに染まっていた。

「どうしたのです？ マスター」

おぞましい。

我が手で染め抜いたこの赤が、魔性の輝きを放っている。カイガラムシを煎じた染料の壺から出した純白の布がこのように――

「ああ、美しい、マスター。あなたの頬はまるで薔薇のように輝いていらっしやる」

――このように、赤に、狂うほどに赤に染まっている。

頬に触れるセイバーの唇。柔らかく、瑞々しい。この私の唇が色あせてしなびて感じるほどに肉感的な唇で、そして私の頬を犯すほどの口付け。ふちゅう、と濡れて吸い付く音がする。頬に感じるのは、軟体の蛭蝨に這われているようなぬるっとした感覚。

「う……ああ……」

手が伸び、私の胸をまさぐる。

外套と服の上から触られているのだが、その指が荒々しい。鉄の骨に錦が巻き付いたような指が、私の乳房に触る。指が揉む、たふんと触れる私の乳房。この胸をかつて触れた男たちがいた。触れて褒め、溺れ、そして憎しみを込めて握りつぶした。何も言わず愛してくれたのは宗一郎様だけ、だけどこのセイバーの指は……

「あ、く、ああ……」

頬に口付けされた唇が、私の耳朶に這っていく。セイバーは私の肌を下で舐める、それは皮膚の内側に差し込まれ、くすぐられるような感触。舌が柔らかく、そして熱い。唾液は酸となつてじりじりと私の肌を、肉を、骨を犯すような。

セイバーの指が、矛盾している。それは私を押しさえつけ、自由を奪いながらも私を愛している。抱きしめているのではない、捕らえている――その手の内に抱かれることに喜びはなく、恐怖を感じる。それは刀を抜き、襲いかかられるのと異なる脅威。

「はあ……マスター、ふふふ、どうされたのです？」

鋼の網に捕らえられた――

セイバーだと思っただけ、鋼細工の赤い蜘蛛であったような。外套から長衣に潜り込む指は、がさかさと動く節足を思わせる。決して醜いわけでも硬いわけでもない。この私の指より細くしなやかであることだろう、だが――心象に浮かぶその指は、絨毛の浮いたエチオピアの蜘蛛の如く、私の中に忍び込む。

かさかさと音を立てるのは私の衣か、かの乙女の指か

「こんなに震えられて……ああ、もしや感じているのですか？ マスター」

胸を揉む手。それは柔らかく愛撫しては呉れるが、まるで蜘蛛が張り付いたようだった。セイバーの腕の中で抗う、この腕の中にいるのは危険だ、それもサーバントにはなつたとはいえ、セイバーのそもそもの脅威に比べれば私はあまりにも脆弱――

セイバーはそんな私をからかう様に、くすりと笑う。艶容な笑いで、そんな笑みをセイバーが浮かべるとは夢思いもしなかった――斯く笑う女に落とされた私が考えるのも愚かなことであるが。

腕の中では満足にも出来ない。息吹が封じられれば、私はただのか弱い女になる。

宗一郎様の腕に抱かれ一人の女としての快感と弱さに打ち震えるので有れば佳い。だが、セイバーの腕の中で弱くなるのは本末の転倒ではないか。

「ああ……はっ……あ！」

左手を強張らせ、外套から出す。

瞳に映るのは、セイバーの令呪。すでに一つを使い、残るは二つ。この絶対命令権を持ってすればセイバーの腕から逃れることは容易い。だが、一つは保身用、一つは目的のために欠かすことは出来ない。まだ輝く血色の裏切りの刻印を、瞳に治める。

「ふ……令呪を持って私に命令するのですか？ 詰まらぬ事に絶対命令権を使うことは賢いとは思えません、マスター」

私の苦慮を見通したかのようなセイバー。

いや、そもそも命令を用いる事はない。セイバーは我がサーヴァントであり、下がるように命じれば済むだけのことだ。それに、彼女を再び呪縛で縛り、この無礼を身を以て償わせるのがよい。

「——離れなさい、セイバー。斯様な戯れを私は許した覚えはありません」

息を鎮め、命じる。これは命令であり、マスターとサーヴァントの間で有ればまずは有効だった。耳に寄せられたセイバーの唇が、ただ静かに息をする。その時、初めて彼女の手が、唇が、頬が熱い事を私は知った。

熱い。そのままセイバーが燃え上がり、我が身を燃やし溶かすのではないのかという畏れを感じる。いや、サーヴァントは受肉したとはいえ、ここまで熱く軀を燃え立たせる事はあり得ない。セイバーに何が起こっているのか。

「……………」

セイバーは沈黙を守っていた。今すぐにもセイバーは手を離し、私の前に平伏せねばならない。なのに、私を抱いている腕は動かない。私がセイバーに抱えられたまま、彼女の動きを待つ。この距離では命令以外に絶対的に有効な手段がないのかもしれない。

唇を噛む。なぜ、私はこの苦難を招いたのか。想定されうる事態と、今の事態の何が異なるのか。目まぐるしく脳裏に仮定と推論が積み重なる。

だが、回答の代わりに、ひくり、と手が戦慄いた。

私の乳房が漏れ遊ばれる。絞り上げ、胸の芯を遊ぶように——

「はっ、ああ……離れなさい！ セイバー！」

「残念ながらその要望には応えかねます、マスター。みすみす貴女を離して——」

長衣の上から、つまみ上げられる胸の先端。

指に魔力が籠もっているのか、痺れるような乳首に痛みがある。指で揉み、探られ、そしてセイバーの手の内に遊ばれる。サーバントに遊ばれるマスターなど、あつてはならぬ。なれど私はセイバーの手が動けば、このように——

「貴女を離してしまえば、折角のこの逢瀬が楽しめなくなります。それはあまりに、惜しい」「く、ああ……うう……」

「おかしいですね。感じるようにして差し上げているのに……あまり胸は感じないのでしょ

うか？ マスターは」  
指がまさぐる。胸を大きく揉まれ、摘まれる。裏地が乳房の肌に押し当てられ、布目が肌に跡として残ってしまいそうなほどに。セイバーは私の耳朶を舐め、言葉で私を弄ぼうとしている。腹を押さえる彼女の手が、しっかと私を押さえ込んでいる。

セイバーの息は、占いの贅の腹の中から吹き出る熱気のように熱く、肉の薫りがする。

宗一郎様の冬の風が杉の梢を鳴らすような息ではなく、この玄室の中に立ちこめ、岩の肌に染みこんでいくような声。軀の髄がひしりと震える。魔女であるこの私が、闇のなま暖かさに恐怖する、何という——皮肉

「そうですね……マスターの愛しい人は、あまりこちらを可愛いがってはくれないのですか？ 惜しいことをされます、このように心地よいのに」

胸を揉み続けられ、セイバーは——宗一郎様のことを押搦する。

頭の中で、憤りが渦巻く。噛みしめた唇が千切れて血を吹きそうになった。なぜ卑しい娼婦風情のセイバーに、我が身が辱められるならまだしも宗一郎様のことを言われるのは我慢のしかねることであった。  
喉から怒りを迸らせる。

「お止め！ 宗一郎様への無礼は許しません！ セイバー」

「おや、まるで命令を使いかねぬような剣幕ではないですか？ マスター……」

セイバーに、はぐらかされる。言葉には笑いが滲み、私の憤激を愉しんでいる節も感じる。頭の中に憤怒が宿り、何もかも忘れて振る舞いたくなる。だが、私の理性が許さない。なぜセイバーがこの様な振る舞いをするのかを判別させねば……

耳から頬を舐められる。セイバーが舌を伸ばし、私の肌を舐め続ける。舌が見知らぬ呪文を肌に印すように、くるりくるりと唾液で跡を残していく。胸は心地よいと言うよりも、痺れるような悪い快感に満ちていた。

あの傲慢な男たちにまさぐられるのと違う。彼らの囁く言葉は偽りで、触れる手に愛など無かった。

このセイバーは、歪んだ愛に満ちていた。女が女を愛するというレスポスの愛ではない。

たとえ私が男であったとしても、セイバーは同じように振る舞うだろうと……

「貴女……離すつもりはないのですね、セイバー」

「ええ、美しいマスターを我が腕の中にお迎えして、離すのはあまりにも口惜しいですから」

セイバーの言葉は、真意を測りかねる。彼女が嘘で身を鎧うには気位が高すぎ、また真に口になっているのであればセイバーならざる何かである気がする。だが、間違いなく彼女はセイバーである。

首を巡らせ、セイバーの顔をせめて振り返ろうとする。

精一杯後ろを向く。私の頬に口付けしていたセイバーの顔が、視界の片隅に写る。

それは綺麗な造型のなした女性の貌であった。彫りの深さと眉と鼻梁は、美の女神の手になるかの如く。だが、唇は濡れて赤く、それを舐める舌は嫉妬の女神のそれだった。

そして、緑鋼玉の瞳は、なぜ——かくも深いのか。

これは如何なる神の手の、如何なる工人の手にもならざるものであった。喩えるのなら永劫の昔に星界の彼方から至り、オリュムポスの山の髓として埋もれ続ける不可触の宝玉。魔力があるというのではなく、ずるりとその中に飲まれてしまうような戦慄。

声を張り上げないと、飲まれる。見たことを後悔する瞳。

宗一郎様の水面のように静かな瞳と対極的な——

「なぜ斯様な真似を……答えなさい、セイバー！」

「……戒めから放たれ、佇む貴女を愛したくなりました……それではいけませんか？ マスター」

顔を背けるが、唇が私を追ってくる。顎に触れる唇、そして、それに首を逸らしてもじりじりと吸い付けられて行くような感覚を覚えた。手が動く、両手で押さえ込もうとしても、腹部を押さえて下がっていくセイバーの腕は止めようがない。

「ええ、それでは納得されなんでしょう、マスター。ですが……」

じり、じりと腕が下がる。締め付ける鉄の輪から身体を抜こうと暴れるのが私の身体の一

うで、もどかしい。その力を込めようとしても、胸を触れ、頬を舐めるセイバーがそれを吸収略奪するようで。

「そうですね、このような所業……いえ、このような私になれと望んだのは貴女ではないですか、マスター。貴女は望んでいたのでしょうか、私が貶められてもあの潔癖なセイバーのままでありつづけると」

逃げる動きを、止めた。

彼女の言うとおり、私がセイバーを墮落させることを望んだ。あの理性と貞淑と忠誠を体現した美しい彼女を本能と淫蕩と奔放に支配される女に墮落させたかった。しかし、彼女が言う様にどこか心の中で彼女には元の姿であり続ける、いや、あろうと縋り続けるところを期待していたのではないのか、と。

頭を振る。ここで迷えば、セイバーが何であるのかを判断できなくなる。

「そうでしょう、私が白い乙女の心のままで淫欲にまみれ、身体に逆らえず、快感に震えながらもかつての姿に戻ろうとし、穢れがそれを許さないという絶望に身震いする——それを貴女が眺めて悦ぶ、そのお積りだったのではないのかと」

一言もセイバーにそれを吐き付けた記憶はない。だが、セイバーの言葉はかつての己の心を鏡で覗き込むような思いを抱かせた。そう、白いドレスに身を包ませ、令呪と呪縛で苦しめぼたりぼたりと滴らせるセイバーを見つめながら想ったのはそういう、刹那の破滅的な思惟であった。

「……く、あ」

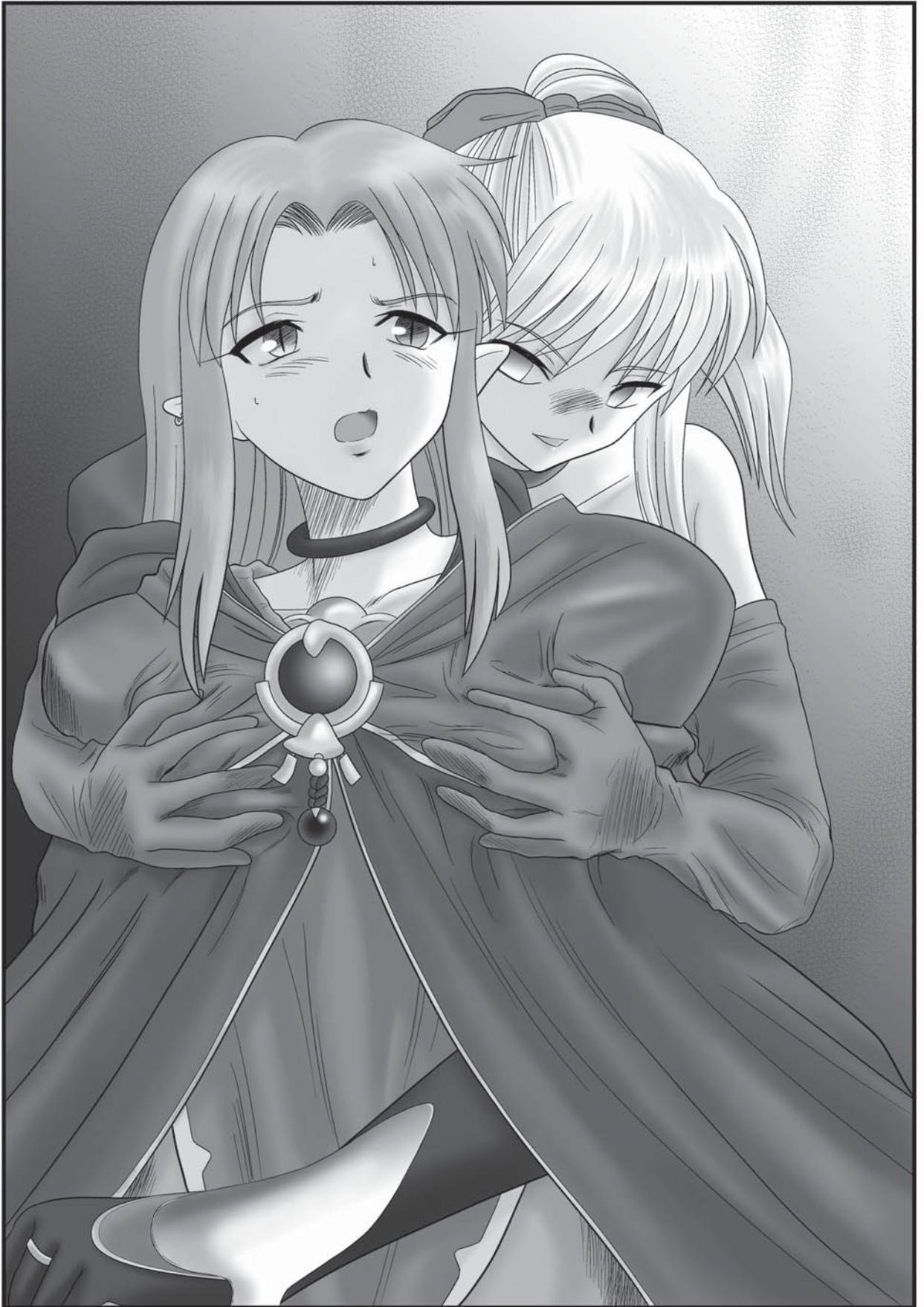
「それを恨んでいません、マスター。それは勝利者であり主である貴女の権利です。ですが……今の私は」

胸を掴んでいた手が離れる。

一瞬息が出来る。その間で詠唱を叩きつけ、彼女から身を離すべきであった。だけど、彼女の言葉に聞き入ってしまった。いや、離れた手が何を為すのか。

あ、と声が漏れた。

私の前に翳される、セイバーの手。



それは赤い絹の手袋に包まれていた。ああ、真紅い——血を煮立たせる赤、私が彼女に填めた手袋は純白であった、処女に似合うのは至白であった。でも、いつの間にかこの様に赤く染まってしまったのか。

指が、歪む。美しい乙女の指なのに、関節が曲がるその様は剣を握るだけではなく、それだけで私の肉を削り、骨を折り、そして臓物をえぐり出しそうな鋭さと力強さ、そして、それが、今のセイバーそのものなのだ。

強張る指が、ふっと緩む。

鉤爪の指が、柔らかく流れる。絹の手袋の中で、骨がないようにぬるりと——指の動きが物語る、セイバーの異なる姿。それに見入る私は一体何を……

指が、顎に触れる。

魔女である私が、墮ちた聖女の指を恐れる。掴まれ、その指に操られる私。あの指の動く姿が私の脳裏の中に刻まれる、じくりと痛い——深紅の色の、世界の秘めた燃え上がる狂気の具現。

「これが今の私なのです、マスター。貴女は私を責められますか？」

「いや、責めるといふ言葉はおかしい。貴女はそれを認めるしかないのだから」

顎を、少しづつ後ろに向けさせられる。

顎を掴むのは、紅い手。絹の肌触りは滑らかで、そして肌が燃えるように熱い。掴まれ、顎の骨がキシリと震える音を聞く。私の首の筋を彼の指が、ねじ切るのは容易い。

「な……なぜ？ 何故あなたは」

せめて抵抗はしようとする。男にねじ伏せられるのであればいくらでもやりようがある。抵抗を示しながら従順に、貞淑を装いながら淫蕩に振る舞えば男はいくらで騙される。だが、セイバーは女だ。いや、私の知る女という物から逸脱した、何かになっている。

「なぜあなたは——その、朱は、一体」

何故、転じたのか。血に染まった訳ではない、彼女の肌から血の腐った匂いは感じない。首が後ろを向かされる。身体を押しさえる手は、私の下腹部を押ししていた。まるで岩場に柔

らかい鮎の腹を押しつけるような……セイバー指は私の身体を押しさえつけ支配していた。あの緑鋼玉の穴のような瞳が、私を見据える。

この腕の中で震える。腹がぼっかりえぐられ、上半身と下半身が生き別れになってしまったような身体の異常。セイバーの唇に、私はせめてもの疑問を吐き付ける。

いや、彼女も分からないのかも知れない。変えてしまったのは私なのだ、セイバーの悠然として淫蕩な振る舞いに、彼女の理由が潜んでいるように感じている、それが過ちなのか。

唇を見る。答えるのか、それともあざ笑い、私も食い尽くすのか——

「なぜ、そんなに変わってしまった——私の望む有り様以上」

「——それは貴女の符が、私の理を断ち切った時から全てが始まっているのです」

セイバーの唇が、答えた。

符。裏切りの符。ルールブレイカー。契約を破棄し、ねじ曲げる宝具。それを私はセイバーの胸に突き立てた。それはサーヴァントの契約を曲げ、奪取するためのものであった。だが何故——

唇が近づく。肌が触れ、熱さが伝わりそうだ。

セイバーが変わってしまったのは、ルールブレイカーの影響……

「そうです、ね、もし私を飲み尽くすほどの巨大な力であれば私の属性すら反転したことでしよう。でも、貴女がしたのは理を裏返すことではなく、理を解れさせること。私の破綻は貴女に触まれた、そして——」

やめろ、セイバー、言うな、触れるな、私に——

令呪を撫で、腕ごと掴む、これを使えば全ての計画は覆る、それはあつてはいけない事態なのだ。だが今のこれも決してあり得てはいけない変化なのだ。セイバーはセイバーであった、だが、紅く淫らに変わっている。

ならば今、使うしかないのか——

「……………」

唇を、奪われた。

ああ——あの人にも触れられたことのない唇を、あのぬらりと輝くセイバーの唇に。

身体力が抜け、崩れ落ちそうになる。私の中を浸すのは、酸のような失望。魔女だと己を誇っても、接吻一つでこうも――

「ひっ！」

だけど、崩れ落ちることも許されなかった。

セイバーの手が、私の足の付け根を押し上げていた。長衣の上から指が触れたのは、股間の柔らかな丘の上だ。そこを強く、腰が窪みそうなほどに強く。

「うっ、あああっああああ！」

悲鳴が漏れる。責めるセイバーの手は容赦がない。

ギリギリと恥骨が悲鳴を上げそうな、強い指の振る舞い。布地を私の脚の隙間に押し込み、秘所の上から舐るように曲がる。まるで指を鞍にして全身の体重を支えさせられるような痛み――でも、叫びを漏らす唇を塞ぐ、セイバー。

「ふん、ん――」

舌が、口腔に進入する。

顎を押さえられ、身体を振り、唇を犯される。セイバーの柔軟な舌が私の口の中を襲った。あのセイバーの強靱な指が顎を開かせ、舌をかみ切る事もできない。ぬるぬらと舌が蛇のように私の中を探る。口腔の中で私の舌はひな鳥の様に怯え、竦む。それに襲いかかり、からみつき飲もうとするセイバー。

「ん、ん、んんー！」

舌と指が、同時に私を苛む。

舌が私の舌と絡み、ぬるりと動き震える。舌は口の中で逃げようが無く、セイバーの唾液を口の中に流し込まれ、黴られた。柔らかな舌の肉なのに、息ができなくなるほどに口の中を踊っている。

指が、ぐりぐりと私の秘裂を犯す。まるで女の身体を知らない若者のような乱暴だが、その粗暴な指の動きすらも淫らな計算を背に動いている。私の襲の中は、その指の動きで濡れていく、感じたたくも濡らしたくはないのに、痛みが私を滴らせることを知っているように。

「あ――はあ――」

唇から解放される。顎を掴む手はそのままに。

セイバーの碧の瞳が笑う。ああ、美味でした、と満足しているように。そしてもっと私の身体と心から甘美な味を絞り出せるという自信を感じて居るみたい。ぞく、とそのセイバーの瞳に向けられると

「……難しいことは、あとでいくらでも考えられます、マスター。私のところに来たのはこうして……愉しむためではなかったのですか？」

はあ、となま暖かい息を浴びせられる。口の中に入った唾液は、私の舌をオビウムに酔うように形のないなにかにさせていた。セイバーに接吻され、指で黴られ、魔女である私があるままにされている。令呪を使えば引きはがせる、だがそれがどうなるのだ――

そんな思考を妨げるようなセイバーの指の遠慮のない動き。

ぐしゅりぐしゅりと、指が震える。憎しみながら愛おしむ、そんな指の動きであり、粗野な動きは指に絡んだ布が和らげ、私の秘芯を感じさせることを知っているみたい。……

「ああ……はっ、ああっ、んー」

「ふふ、マスター？　ここはどうですか……感じるでしょうか？　こうすれば……ん……」

「ひっ、ああ――あああ！」

仰け反る。腰がじんじんと痛むような快感、それをセイバーの指で感じてしまうことが口惜しい。陰核を根ごと恥骨に押しつけられ、ぐりぐりと潰される。爪先立ちになり、ふくらはぎが震えそうな刺激――声を上げないと、身体に穴が開いてしまえそう。

「いー……ああっ、ひい……ああ……くっ、あああ……ううー！」

「ああ、湿ってきましたね、マスター……こちらは感じやすい方なのですね、わかりました」

「はっ、う……ああっ、ひ、いい……」

私の声が、地下室に木霊する。耳にはいるのは、響いてよりいやらしく感じる私の声。

それは甲高く、かましい声であった。セイバーの綺麗だと感じてしまう、意地の悪い声と比べるとまさに淫らに悦ぶ魔女であった。

私はセイバーに見つめられながら、秘所の刺激を貪っている。セイバーは私の嬌態を具に眼に治めているようだった。なにをするのか、されるのか。すでに彼女の腕の中にあることに疑問を感じなくなりつつある、私。

「あ、あはあ……セイバー……これは……私への、うら、ぎ……り……」

彼女のドレスの胸を掴み、あくまでも尋ねようとする。

だが、私の視界の中であの唇がまた唾う。まるで鎌首をもたげた蛇がくわ、と牙を剥くように、私は竦み上がるしかない。再び私は唇を奪われる——

「んっ、んんー、んんー！」

口を吸われる、じゅぷり、と音を立てて私の唇が震える。これは裏切りなのかと問う言葉を吸い尽くすように——いや、私の精を彼女は吸い取ろうとしているのか。でも吸われるのは唇だけ、いや、唇を奪われるだけの方が遙かに、辛い。

「あ、ふあ……ああ……」

「裏切り？ 異な事を言いますね。いえ、これは忠誠の証です、マスター。私は貴女をかくもお慕い申し上げています——」

頬に、口付け。

そして私を責める指の動きが止まる。さんざ弄られた秘裂が痺れ、腫れ、じゅくじゅくと女の蜜を垂らしている。逆らいたいがたい女の身体であることを呪うほどに、快感に震えている。そう、もつと指で、千切れるほどに触れられたいと感じているのだから……

「く……世迷い言を……そのような言に、私が感わされると……も……」

だが、心はまだ抵抗を覚える。セイバーの言葉は真摯さはなく、今でも腹中に一物のある濁りを感じさせる。それは清水に垂らした血が水を濁らせるように……

セイバーが軽く首を振る。とんでもない、と唇が語っている。だがそれを信じることはできはしない。そも、魔女である私に信じるべき物などないのだから。

「では……言葉ではなく、行いで私は証明にするしかありません」

「は——あー」

胸元のブローチが、外される。外套が背中に流れ落ちる。

セイバーが私を抱える。長衣姿で、面が露わになってしまう。セイバーの腕に抱き上げられ、あの瞳で私を見下ろされると、逃げる気が萎える。金の髪は輝いているが、白く眩しい光

を受けるのではなく、この薄暗い玄室の中で、油で灯火を燃やして移すような暗い黄金の光

「……何を……セイバー……」

「そうですね……貴女のマスターの流儀をお借りします。優しく愛されたいか？ それとも激しく愛されたいか——？」

か、と頭の中を血が巡る。

手がセイバーの頬を打とうと上がる。確実に私の掌はセイバーの頬を打っていた。ぱしんっ、と小気味良い音が立つのかと予期する、が——

ず

そんな音だった。私の掌も、セイバーの頬も、音が立たない。積み上げた砂袋を殴ったようにならずか音、手が青銅の柱を殴りつけたように感覚が無くなる。胸と頭は宗一郎様を愚弄された怒りに震えるが、身体は萎縮していた。まだ私の掌はセイバーの頬に触れている。でも

セイバーは全く動じていなかった。マスターに頬を張られても、唾ったままで。

蠅にとまられた、蚊に刺された、羽虫に当たった、いやそれ以下の、蚤虱が這った方がまだ彼女になにか及ぼす物が有っただろう。なのに、セイバーが——

「な……」

そして私の身体は、祭壇に下ろされる。

被さる深紅のドレスのセイバー。スカートが私の身体の上に広がる、それは薔薇の寢床の覆われるようだ。背中の触れるのは冷たい御影石の壇、だが私の上に広がるのは、柔らかくそして熱い、セイバーの身体だった。

麻痺する腕を支え、セイバーの身体を防ごうとする。

「やめ——やめなさいっ、セイバー——」

「おかしな事を言いますね、マスター。こうするのは貴女が望むことではないのですか？ 淫らな欲望に駆られた私が愚かな振る舞いに及ぶのを、貴女は愉しむのでしょうか。ならば私は殊更に愚かしく淫猥な行いを為さねば、貴女の期待に応えられない。それが忠誠の姿ではないのですか？」

セイバーの論理は曲がっていたが、私に言い返すだけの余地を与えない。身体が被さる。三度口付けされ、あの残酷な手が私の身体を這い回る。何匹もの鋼の蜘蛛が、私の長衣の上を這い回るような感触。肌を犯されるのに、その嫌悪感骨の髄に差し込まれるようだった。

「く、あ……はあ……ん……」

「マスター……ふふ……ああ……いい、こうして……」

「や、はあ……ひっ、う……ああ……」

セイバーの唇から逃れる。口吻なのに脳を冒されるような熱を秘めている。

手が胸を掴む。両手でこね、乳房を觸る。その手の中で形を変える私の胸が、息苦しい刺激に息を止めそうになる。そして手が私の背中に回り、下り、腰を撫でると私の尻を触れる。双の臀部に食い込むセイバーの手。指にぎし、と掴まれる——

「はあ……うう、ああ……」

セイバーの手が尻を愛撫する。それはセイバーの身体に腰を押し上げるようにされ、ぐりぐりと動かす手の舞いだ。撫で、揉まれ、掴まれて脚が萎えていくのが分かる、今手を離されても私は立ち上がることが出来なくなりそう、そんな危険な快感。

「はあ……マスター、成熟された美しい身体です。かくも心地よいのであれば多くの者が貴女を傾国傾城の美女と愛したことでしよう。私もマスターにお仕えでき、悦ばせることが出来て……嬉しい」

聞きようによっては褒め、聞きようによっては貶しているセイバーの文句。

でも、私は喘ぎ声を上げながらセイバーに抱かれるしかない。私の身体もセイバーの押しつけられる身体の熱に犯されそう、背中に触れる御影石のごつごつした冷たさがむしろ救いであった。セイバーの肌から立つ花と汗の薫りが、私を包み込む。焚きしめた服の香料を凌駕する、生臭いほどの薫り。

「く……はあ……」

セイバーの手が、私の長衣の裾をたくし上げてくる。

貫頭のこの長衣を脱がせようとしているのか、セイバーはするすると手際よく腰元に布地を集めていく。脚が露わになり、セイバーのあの紅いドレスに直に触れる。

そして、セイバーの手が私をめぐり上げる。長衣にはゆとりがあるので、脱がされるのに抵抗するのは難しい、腕を引き上げられ、私はセイバーの腕の下で——

私の姿が、セイバーの前で全て、晒される。

「う……く……あ……」

緑鋼玉の瞳と金の眉、そして朱の唇の笑いの下に私は晒される。

セイバーの腕の中で、胸を隠して身体を振る。肌に触れる空気がなま暖かい。そして、真上のセイバーの赤が私の肌を熱で犯してくるような気にさせられる。顔を背け、セイバーが何をするのかをじっと待つ。

「震えていますね、マスター。可愛らしい」

「く——」

唇を噛む。紅いドレスの華美なセイバーの前で、私は見窄らしい裸を晒している。

セイバーの瞳はただ好色なのではない。隙のない瞳で肌を愛撫する視線、それだけで震えてしまう。そして手が伸び、私の肌を撫でる——

「ふう……あ……」

服の上から触れたときは鋼の蜘蛛のようだった指は、まるで絹の蛇のようで。

私の裸身の産毛を剃るように、絹の蛇が這う。肌の上を撫でる紅い絹の手袋。ざわり、ざわりと総毛が逆立つ悪寒。嗤われ、愛撫される、セイバーに。

腹を撫でられる。胸を隠し脚を台合わせる私は乙女のように。羞じているのではなく、恐れている——どのような振る舞いをして、セイバーは私を愛するのだろうか。

命令には服従するはずのセイバーは、ことごとく私の命をはぐらかす。これでもサーヴァントといえるのだろうか、いや、魔女たる私がそのような弱音を吐くとは如何なる事か。それも、聖杯の理を枉げた私が何を焦慮に感う。

だが、この愛撫は——見も心も震え上がる。

「ひ……ああ……く、ああ……」

セイバーの腕の中で、私は悶える。

滑らかでしなやかで、それでいて熱い指が私の肌を撫でる。背中伸びた手が私を抱き寄せ、剥き出しのセイバーの肩と私の首が触れる。ドレスの柔らかい布地が私の身体を覆い、それは肌をくすぐる——祭壇の石の冷たさだけで、私の正気を保つことが出来る。

だが、私は絹の蛇にまわりつかれ、陵辱される——

身体を振り、その手が背中を、臀部を這うのから逃れようとする。だが挟まれた私が身体をねじらせても、セイバーが触れるのが私の背中ではなくお腹になるだけだ。

詠唱と魔術で引き離す——それはこれほど近くては無理だ。ならば助けを呼ぶのか？

「う……………はあ……………あ……………く、あ……………」

「堪えているのですか？ マスター……………思うままに振る舞われてください。誰も見てはいませんから……………はあ……………」

誰も見ていない。それは誰にも助けを呼べぬと言うことか。

セイバーの唇が背中を這う。項から背筋を伝い、唇のそのなま暖かさで潤いに身体を振らせる。手はぬるりと進み、私の剥き出しの乳房を、そして力の入らない下腹部を触れる。

祭壇は私の身体で暖められていく。これに私の身体が染みこめば、どこにも逃げられなくなる——セイバーに絡め取られ、魔女であることを呪いながら快感と屈辱の中で呻くことになるのか……………

「はあ、あ……………」

宗一郎様に助けを求める？そして私が淫らな策に謝った姿を見せるのか？

それともあの赤い騎士に？軽蔑と愚弄の浮かんだ瞳に見つめられ、それに助けを求めるのか？そんなことをするのならばいつそのまま溺れた方がましだ。セイバーに罵られ、気をやり、そして——いや、それ以上の何かを予期することも出来ない。

「あ……………く……………ひい……………ああ……………」

直に乳房を撫でる、セイバーの指。私の乳房に食い込み、摘む。後ろから抱かれ、私はその刺激に身悶えしていた。セイバーの唇は首筋に跡を残しそうなほどに激しく触れている。熱い、こんなに——セイバーの触れる肌も、包み込むドレスも。じりじりと蒸し焼きにされる、彼女の淫欲の熱に当てられながら。

「あ……………く、はあ……………」

「ふふ……………ああ、こちらがお留守でした、申し訳ない——マスター」  
「はあああああ！」

腰骨が、雷に打たれたように痺れる。

くねりながら進むセイバーの指が、私の秘所に進入してきた。それはまさに茂みを進み、得物を狩る蛇のように、過たず私の足の付け根に忍び込む。人差し指が厚い布越しではなく、直に擦り上げる。ずりりと剥けるのではないのかと怖くなるほどに——

「ひ、あ、ああ……………くうう……………あ……………あん……………」

「先程も愛させて頂きましたが、濡れています、マスターのここは……………こんなにどろどろにされているのですか、まったく……………」

セイバーが耳を噛み、淫らに囁く。

きゅーつと乳首を締め付けられる。胸がひりひりと痛む。当たる指が柔らかくもみ上げているがそれも、私を快感で翻弄しようとする企みを感じる。

指が触れる、秘裂の中。陰毛を撫でて進んだ指が、髪の中にぐちゅりと潜っている。

こんな陵辱なのに、感じてしまう身体が恨めしい。いや、それを恨む聖女ではないのは、この私は、むしろ僕に辱められ、濡らし、求めるのがまさに世の理を顧みぬ魔女の乱れ方ではないのかと——

くちゅりくちゅりと、指は表は優しく動いている。

でも、淫らで食欲な骨がセイバーにはある。私の悦びが彼女の意に添わないと、また激しくねじり込まれて私は悲鳴を上げ、疼きに身を狂わせることになるだろう。それは恐ろしく、そして私のどこかで渴望していた——

「ああ……………はあ……………ああ……………」

「こんな風に優しく愛されるのがお好みなのですか？ マスター……………それとも」

耳元に囁かれた言葉に、刃が返されたような恐怖を感じる。

それは首に当てられた刃物を動かし、薄皮一枚をそぎ取るような。いや、指が一つ動けば私の首を軽々と跳ねる。飛んだ私の首をセイバーは掲げ、さも愛しそうに接吻するであろう。復讐ではなく歪んだ愛故に、セイバーを止める物は何も無い。物見ぬ私の私が赤いセイバーの喜悦の舞踏を目にすることになるのだろうか？

「それとも……」  
「やめ、て……セイバー……痛いのは……」

口が戦慄き、こんな——弱々しく、吐きたいほどに情けない言葉を吐き出してしまふ。  
秘裂をまさぐる指が、止まる。私の蜜にまみれた指が、髪の間で彷徨う。私は俯せのまま、祭壇に額ずき、屈辱と快感の中でなま暖かく、怯える。

苦痛を恐れたわけではない。ただ、苦痛の向こうにあるセイバーの意思が恐ろしかった。殺される、ということなら恐れない、だが深紅のセイバーの向こうにあるのは、永久に帰れない深さであった。あそこに飲まれると、もう宗一郎様に会えなくなる。それが、私に屈辱の苦杯を飲ませた……

「ふ……」

セイバーが私を唾う。顔は見えないが、分かる。きつとあの碧の瞳を冷たく輝かせ、唇に薄い笑みを浮かべて私の耳をくわえているのである。私の身体を弄んでいたあの絹の手袋が、止まる。閉じた目蓋の中で、血潮ならざる赤が踊っていた——彼女の色に私が犯されていのか、それとも私も彼女の朱を生んだのは、この私の中にある何かなのか。

——青銅の器の底の、赤黒い澱

「はい、マスター……ならば優しく貴女を愛して差し上げます……」

その囁きと共に、セイバーは指を……

私はびくびくと背中を踊らせ、その愛撫に耐えた。酔いしれて絶頂に至る、そんな甘いレスポスの交わりではない。胸を揺すり、揉まれ、つまみ上げ、感じるところを知悉した指の振る舞い——

「は、ああ、く、ひい……は、ああ……」

優しく愛するとセイバーは言った。だが、それは嘘だ。

秘裂の中の指が、二本で私の中をかき混ぜる。くちやくちやくと愛液を練り、私の髪になすりつける。充血した花弁に指が這うと、脚を締め付けてそれに耐える。でも、力強いセイバーの腕は抵抗などものともしない。

強引だった。それは宗一郎様の、何をふるまえばいいのか、それとも何とも振る舞いたくないのかを知らぬが故の無心の動きではない。セイバーは私の心の髪の中を知り、知りながらもその節をも見せずに振る舞う。息と唇はそれを表しているが

「はっ、あ……くう、ああ……」

指は偽り様はない。蛇が、私の中を這い回る。

むしろこのまま私の肌を食い破り、肉の中にぞぶりと噛み食い込んでしまったほうが楽になれる。私は蛇に絡みつかれ、繰り返し返される肌の陵辱。その頭が私の捲れた快感の部位を見つけ出し、先割れの下でちろりちろりと颯りつつける。

「ふふ……良い感じになってきましたね、マスター……こんなに潤っていますね」

セイバーの手が秘所から離れ、濡れた絹が私の腹に滑りをなすりつける。

まるで蜜を擦りつけたようで、そのねっとりとした感触が厭わしい。こんなに淫らのだと私の身体に教え込ませようとするセイバーの振る舞い。

それだけならいい。私がそれに酔う真似もできよう、だがそれは抱かれる快感ではなく、無理強いされた酒で腹の底を濁らせるような不快感がある。それは耐えられる、だが——

「く……あ……ああ……」

「そんな声で貴女のマスターの耳を惑わしているのですか？ああ、まったく魔女というのはこの様に美しく淫らなのですか、まるで牝ですわね、ふふふ」

宗一郎様のことを、セイバーは口にする。

その悔しさが身を苛む。魔女と罵られ、裏切り者と詰られ、騙り者と嘲笑われる。でも、宗一郎様だけは何人たりとも誹らせはしない、それが私の魔女として、そしてサーヴァントとしてのなげなしの誇りであった。

だが、セイバーにそれを汚される。

令呪を使い、彼女を死をも慈悲と感ずるほどの苦痛を与えたとしてもぬぐえるものではない。いや、この紅いセイバーであれば嘘え身を地獄の獣に食われたとしても、私と宗一郎様を唾う唇を動かすことはない。

胸の奥が痛むだが、そのひび割れた痛みに染みこむ、この甘ったるい刺激——

胸を揉まれ、口付けされ、撫でられる。秘所の花卉をぬちやぬちやと掻き回され、子宮が疼く。憎い女に抱かれているのに、私の身体は女として求めてしまう。

「く……だまり……な……」

「牝、ですね、マスター。でも私もかつては性を捨てて聖なる者になろうとしました、そして私は貴女に己の身を思い知らされた。牝であることを羞じることはありません、マスター」

セイバーの弄言。なぜ、魔女が娼婦に惑わされる——

息が荒く、吐く息と吸う息が共に暑い。この玄室の空気がすでにねっとり濁り、私の立てる薫りとセイバーの薫りが混じり、暖め、工房の奥で醸された娼薬の匂いに似通ったものを感じさせる。それを吸い、セイバーは吐く。

「……私も、牝なのですから」

セイバーは、淫らに笑った。

己を牝だと言いつけるセイバー。抱きしめているあの身体が、硬い皮と骨の間にどろどろとした溶けた肉で満たされているように思える。いや、この身体もそれに犯され、口と陰口からどろどろと零れ落ちてしまう、と——

「あ……はあ……うう？」

胸で遊んでいた手が離れ、私の手を掴む。

そして、後ろにねじり上げる——のかと思ったが、セイバーは私の手を誘う。触れるドレスの布地、そして褌と下布の間にそれは潜り込み、ストッキングの感触。手が誘われるのはその上、セイバーの牝の部分。

「あ……」

そこは、しどろに濡れそぼっていた。

絹の下着が重く湿っている。何もしていないのに、彼女は感じているのか——いや、私を抱くことでこんなに感じているのだろうか、その股ぐらの湿った熱さはむしろ気味が悪く、咄嗟にてを引き抜きたくなる衝動に駆られる。得体の知れない生き物の皮に触れ、それを美しいと思いがながらも、食われてしまうという恐怖を感じてしまうように。

「こんなに……私も感じているのですよ。マスター」

「は……ああ……あう……」

私とセイバーは、抱かれ抱き合いながらお互いの部分を触れている。

だが、私が触れるセイバーの底はまるでよだれを垂らす淫ら口のように欲していた。指が触れているが、あの下着の布がなければぬるりと飲み込まれていくような気がする。触れて愉しむなどというゆとりはない。

そして、私はセイバーの指に馴染られるまま。滴った私の液体がセイバーの絹手袋をぐっしりと汚し、そして祭壇すらもぼたりぼたりと濡らしている。褌の伝える官能が、体の中を濁りとなって滴ちていく。感覚を曖昧にさせ、何もかもを諦めたくなる。満ちる穢れた潮。

「はあ……あ、セイバー……そんな……う……」

「ふ、あ……動いています、マスターの指が……いいです、はあ……」

触れた指を僅かに動かすが、愛撫すると言うものではない。むしろ、逃げたがっている指の動きだが、手を押しつけられているので満足に離れることが出来ない。セイバーが私の身体を絡め取っているの、どうしても——無駄、だ。

快感が満ちていく、昇るような宗一郎様の喜びではなく、セイバーはどこかへ臙綱が断たれて流されていくような、不安に満ちた、そして沈むような感触。

「く……はあ……あ……」

セイバーが手を離し、私は急いで手を彼女のドレスから引き抜く。

セイバーの愛液に濡れた肌が溶けてしまったのではないのかと不安になり、撫でる。ぬるりとした肌触りだが、肌は侵されてはいない。だが、セイバーのあの紅い熱さがこの手に伝染し、骨まで飴のようにぐにやり、と曲がるようだった。添えた指に力を込めると、一本の腕の骨が融けて曲がるよう……

「では、牝として牝を愛することにします、マスター……ほら」

「あああ……」

セイバーの指が、私の中に潜り込む。

膣口に宛われた指が二本、重なり合って私の中に入る。入り口を抵げられ中にねじり困れる。内側を抵げられ、侵される感触——腰が跳ねる。指から逃げようと動くが、穴蔵に潜り込むこの蛇のようなセイバーの指は、中へ中へと進んでいく。

「う、あ、はあ……ひ、ああ……」

「ああ、温かい……マスターの肌はひんやり冷たいのに、中は私の指を溶かしそうだ。この締め付けで貴女のマスターを魅了しているのですね、これでは殿方は堪りません」

胎内に侵す指。耳元に囁きかけられる辱めの言葉。

「私の指を噛んでますよ、マスターの膣が……」

「く、ああ……ひ、あ、あう……」

それでも、この官能に逆らえない身体。

感じたくない訳ではない、感じ方が問題なのであった。胸を掴んでいたセイバーの指が私の唇を触れ、指が口を割って忍び込む。舌に絹の布地が触り、指がかき混ぜられて私の舌をさぐって摘もうとする。

一方的に奪われ、与えられる快感ではない。私とセイバーは捻れて繋がり、彼女は私の身体から翻る快楽を得、私は奪われる快感に浸される。口唇も陰唇もたらたらと分泌液を流しながらセイバーの指を受け入れていた。

「ん……ふあ……あ……く……」

指が淫らにかき混ぜる。口の中と体の中にそれぞれ二本つつ、その指がバラバラに動く。螺旋に捻れる蛇に侵される感触が身体に広がる、そしてこの快感の蛇は力強く、そして疲れを知らず、果てて上り詰めることもない。ただ私をくちやりくちやりと溶かし、蝕んでいく。

「ふ……マスター……濡らしていますね、私の手首までマスターの液で浸りそうです」

「くあ、あ……ふ……うう……」

粘膜の中を掻き乱され、足掻く。割られた唇からたらたらと唾液が垂れ、顎を汚す。セイバーは私の背中に乗り、まるで私を指で琴の如く鳴らしている。頭の中に紅く熱い何かがじわっと湧く、それは血に似て異なる、もつと深い液だった。

ぐちゃりぐちゃりと――

セイバーの指が、あの絹の蛇が私の中を巡る。ああいつまで私はなぶりものにされるのだろうか。指は淫らに、深く私を犯している。秘所の中の感じる箇所を撫でられたかと思う

と、舌を挿んで指が喉を犯そうとする。たっぷりと唾液に濡れた指を舐めさせられる最中に、指が私の髪を擦る。

その度に声にならない喘ぎを漏らす私。セイバーの身体と祭壇に挟まれ、私が生け簀の肉のように切り開かれている。体内の回路が快感に染まり、動かなくなる。セイバーに拮抗できないという力の関係ではなく、この私の身体が、快感によって鈍っていく。

「あ、はあ……く……はあ……」

「ここですか、マスターの一番感じるところは……中からこんな風に刮げられて、貴女は悦楽に酔いしれるのですね、マスター――」

「はっ、ああああ！」

ぐしゃりと胎内の指がそこを突く。腹に面した中の壁、そこをセイバーは見つけ出して、耳には言葉を、口には指を、そして秘洞の中のしごき始める。

身体がぶれる。腰の曖昧な感覚のなかで、ずきずきと痛みにも似た鋭い刺激がある。それは腹の奥に痺れるように上がって繰る――

「はっ、ああっ、あああう、ああー！」

「いい声で鳴きますね、マスター。ああ、こうし続けるといいのですね、ほら」

「ひっ、やっ、ああっ、ぐああ、はああああああ！」

喉の奥から出る呻きは、肺ではなく子宮が臓腑を捻らせ上げるよう。

セイバーの指が激しく動き、じゅぷじゅぷとその箇所を擦過する。中を男根で突くような短く激しい動き、だが奥底まで満たすことはなく、壁のそこをただひたすらに、意地悪くなで上げる。

曲がる指が突き破り、お腹をぼこりと持ち上げそうな気がする。

セイバーは息を短く吐き、私の中を責めていた。腰が踊りそうになる、きつい感触。内太股の筋からふくらはぎまで攣りそうな、興奮。じゅっじゅっじゅっとして淫らな水音を立てる私の身体。そしてセイバーの指を舐め、その快感に酔いしれる私。

ああ――何も考えられなくなりそうな、紅い闇。

恥骨の髄から脊髄へ、そして脳へと伝わる痛覚は甘酸っぱく、舌を酸くさせる。セイバーの愛撫、いや責めが私の子宮ばかりではなく、そこらにじみ出て体の中で水ぶくれを生む。いや、膀胱にこんな刺激が伝わり、私は――

「ひゃ……ああ……く、はあ……」

「いいです……美しいですよ、マスター……貴女のマスターはこうして愛しているのですから貴女を——こんな風に——貴女を溶かして一匹の牝にもどす様に。ふ——」

「はっ、ああっ、あ、はああ……」

身体がぐくぐく震える。快感が脊椎の椎間板を一本一本外していきそうだった。そしてセイバーに抱かれ、愛撫され、骨の外れきった柔らかく匂う快感の肉に私の身を変えられてしまう、そんな妄想が脳裏にしめる。

水ぶくれが体の中で疼く。じくりじくりと中に水が溜まり、それは膣から愛液になって流れることが出来ない毒素を満たしているように感じる。下腹部がぼっこりと膨れ、その水ぶくれが弾ければ私の肌は破れ、血と膿が入り交じった何かを噴出させそう。

いや、違う。そんな醜く腐った肉ではない。私の中に満ちているのは——

熱い、悦楽のなかで有らぬ想像が私を蝕む。もう脳は役に立たず、神経と子宮だけが私に至るべき所に導いてくれる。と。

腕に力は入らず、肌で暖まった祭壇の上で悶える。

「ひ……い……ああ……もう、ああ……くああ」

「さあ……見せてください、マスター。貴女が快感の中で果てる姿を」

セイバーが指を、激しく踊らせた。

身体の中の水ぶくれが、弾ける。それが一気に身体の中の水路を下り、外に溢れようとした。ぶるっと腰を振るわせ、背を仰け反らせて私は——

「はあああああああ——」

私は、潮を吹いて——果てた。

目の奥が真っ赤に染まるような、絶頂。指をくわえ、喉は喜びの声に震える。

花弁を振るわせ、胎内から溢れた液を撒き散らかした。セイバーの手に当たり、はしたなくその手を汚し、そして飛沫は跳ね返り私の太股をもびしゃびしゃと汚していく。腰骨が振動し、何度も胎内を収縮させ、その液体を吐き出した。

「あ……はあ……ああ……」

痙攣し、引きつった身体から力が抜ける。

セイバーの手によって果てさせられたという屈辱、そして潮まで噴き出して悦んでしまった身体の淫らさ、そして冷酷に私を弄んだ紅いセイバーの冷酷さ、全てが混じり合ったり、その粘った静かな水面の上に私は浮いている。口に当てられた指が抜かれ、また膣の中へのめり込んだ指も外れ、ぬぷりと音を立てるのを、気怠く聞く。

「は……あ……」

背中で息をする。身体を滲ませる興奮と快感が、私の背中に蟻の。

祭壇の上に、私は横たわっていた。セイバーの身体が離れる。あの紅い彼女はどんな顔で私を見下ろしているのだろうか？あの緑鋼玉の瞳の中の、深い異界は私を捕らえているのか——

ふ、と空気が揺れる。

萎えた腕を付き、身体を持ち上げようとする。私の上からしたのは、かすかな笑いだった。漏らすのはただ一人しかいない、笑わせなければ笑わせておけばよかった。だが、その姿をどうしても私は見ずにはいられない。

「ふふ……ふ……」

——紅

目の中が血に焼き付いたかと思う、赤と金の姿。

セイバーはあの朱のドレスの姿で私を見下ろしている。覗く彼女の肌は白いの、それも赤く染まって見える。ただ金の髪と碧の瞳が、揺らめく赤い陽炎の中で浮かんでいた。

唇が、手袋を舐める。濡れそぼった朱の絹をびちゃりと音を立てながら。

セイバーはそれを陶然と、舐めた。私に見せつけるように、こんなに汚した淫らな身体をしているのが貴女なのですね、マスター、と物語るように。

「く……これで……満足したの？ セイバー……」

切れ切れの声で、そう問いかける。

そんなはずはないと思っていた。赤いドレスのセイバーは、ゆっくりと首を振る。

結われた金の髪が振られる。それを、朱に染まった彼女の中で美しいと感じてしまう――

「いいえ。それは貴女も良くお分かりではありませんか、マスター」

指を美味そうにしゃぶる、セイバー。

頭を垂れる。まだ、私のの上には続くのか、この苦しい快感が。彼女はサーヴァントでありながらこの私を快感で犯し、下克上を為そうとしているという訳ではない。ただ彼女がサーヴァントであり、かほどに朱に転じているが故に、真摯に――私を求めているということなのか。それが歪みながらもひたむきにこの身に降り注ぐ。

長く、息を吐く。下半身が液に濡れてべたりと祭壇に張り付く。

私の立てる淫臭が立ちこめる。光と風の少ない玄室の中で、重く私を覆いつけているこの空気が、それをかき分けて進んでくるセイバーの手。

「は……あ……」

掴まれたのは尻だった。べたりと濡れた手袋が重く私の肌を撫でる。

円を描きながら、臀部の肉を揺り動かす手。セイバーもまた祭壇に上がり、私の後ろを占める。身体を起きあがらせることは出来ず、撫でられながらセイバーの思惑を察しようとする。

「そうですね、マスターの陰門を奉仕させて頂きました――次は」

腰を持ち上げられる。膝が潤滑液に滑り、落ちそうになるがセイバーはしっかりと私を支えている。腰を持ち上げて高く掲げ、セイバーの貌の前に翳すように。

まるで、雌の獣だ。それも一端は達して汚れた秘裂と尻をセイバーの前に晒すなどというの、獣以下の所業だ。そう、魔女で有れば獣以下の汚らわしい交わりを何とも思わぬだろう、今の私もそうでなくては……

「次は、こちらを愛させてください、マスター」

セイバーの手が、尻肉を割る。

剥き出しにされた私の菊門が、疎み上がる。身体が一番奥に隠された、女陰よりも恥ずかしい箇所がセイバーのあの瞳の前に晒された。喉が肺の中の空気を漏らして微かな呻きとなって私の口から漏れた。

「あ……そ……」

「ああ、可愛らしいですね、マスターのアナルは」

「ひっ！」

息を吹きかけられ、腰が疎む。

セイバーは私の尻の穴をまじまじと見つめている。そのようなところで何をするのか、こは交わるための場所ではないというのに――疲労の中で逆上せふやけていた私の身体に、冷水を浴びせかけられるような。

セイバーの指は、まるで淫らな拘束具のように私の尻を開いている。

息をすると肛門が収縮するのが分かる。はあはあと息が甦り、私は尻を掲げたままで身体を硬くする。セイバーはじつと私の秘部を眺めているようだった。

「前の方は成熟した淑女のようですが、後ろは……まるで汚れを知らない少女のようです」

「な……にを……ああああ！」

ぬるっと、肛門にセイバーの舌が触れた。

腰の奥から内臓に流されていく、ぬるっとした触感。セイバーが舐めているのは私の排泄器官ではなく、舌がもつと奥の内臓を舐めているのではないのかと錯覚してしまう。でも、あのセイバーの舌で舐めているのは、私の恥ずかしい肛門であった。

悲鳴を上げる。こんな所を舐められれば、身体がおかしくなる。

ぴちぴちと舐める音が、私に聞こえる。唾液を塗られ、なま暖かい舌が軟体生物のように私の敏感な陰門の上に這う。

「ふあああ！ひい、ああ、くう……ん、はあ……ああ……」

「ん……んちゅ……ふ……んちゅう……は、ああ……」

肛門に接吻をされ、吸われる。

あのセイバーの聖なる美貌を私の尻の穴に当てているのであるから、これ以上ない屈辱を味合わせているはずであった、が、著しく羞恥と当惑に酔うのは私であった。唇で肛門をまさぐられ、舌が窄まりをつつき、中に進入しようとしていた。腰を振って逃げようとしても、セイバーの力に逆らうことなど出来ようもない。

「ふふ……おしいです、マスターのアナルは……」

セイバーがそんな、倒錯的な言葉を私に投げかける。

後頭部が痛くなる、舌の快感、背中を弓反らせ、私は彼女の執拗な舌技に震える。秘裂の果実のような快感でも、陰門を突き上げられる獣肉の快感でもない、海の底の蛸に絡みつかれねとねとと吸われるような、じつとりとした快感。

「あ、はあ……そんな……お尻だ、なんて……」

「おや……やはりそうですね、マスターはこちらを愛されたことはないらしい」

舌を離れたセイバーの、妙に納得したような言葉が聞こえた。

セイバーもそんな経験は無いはず、いや、まだ彼女は処女であるはずなのに。こちらで性交をすることを彼女は言っているのか。

魔女なのに、動じてしまう。

いや、聖女たる彼女を侮辱するときには処女のままで快感の内に弄ぶことを考えたはず。であればこの様な畜生以下の交わりを彼女に強いるはずだった。だが、我が身に強いらればそのようなことを出来ない、本能が警告を発する。

ひくひくと震える、私の肛門。

ここをセイバーに犯されると――

「どうさえたのです？マスター、当然こちらの愛技をご存じかと思いましたが。この私を処女の身体で愛玩するために、マスターはこちらの愛撫の技も長けているかと」

「く……あ……」

「ですが、よもやマスターがアナルの技をご存じになれないとは、失望しました」

セイバーは冷酷に言う、再び……

「ひいひい！ああっーううああああー」

「んふ……ひくひくと可愛らしく震えています、マスターのアナルは、自分で触れたことのないようですね、私の舌が触れるとこんなに、窄まらせて……ん……」

くちゆくちくと、淫らな音が響き渡る。

肛門を騷られる、言葉で責められ、身体を動かすこともままならない。身体の奥底をわし

づかみにされ、露わにされ、舌と指で弄ばれる。肛門などという汚らしい穴を、まるで蜜がしたるようにセイバーが舐めている。

肛門の襞を、セイバーの舌が押し広げる。

膝が震え、内太股が何度も緊張と弛緩を繰り返す。おぞましい愛撫なのに、私の秘裂はとろとろと歓喜の蜜を垂らし始める。子宮と陰部とは異なる、もう一つの身体の軸を弄ばれて悦んでいるのだ、この私は――それが女の器官を打ち振るわせ、快感を体の中で増幅させる。

肛門などで、この私が感じる筈はない。

セイバーの肛門を騷ろうと考えたのは、むしろ処女でありながらも淫らであることを感じるはずのない器官に快感を錯覚させて辱める為であった。この私が、そこをこの様に舌でねぶられて感じているなどと言うのは、以ての外――

「ひい、ああ……くう……はあ……」

「マスターのアナルが、だんだん柔らかくなってきました。もしやマスターのは素質が有るのかも知れませんね、この私よりも……」

セイバーが、舐めるくちやくちやという淫らな水音の中で語りかける。舌と唾液はなま暖かく、赤い舌の私の肛門が、尻の奥が騷られると思うと身震いするほどに、それは異質で淫らな光景であろうと。私の尻の中に顔を埋めるセイバー、それはどんなに不可思議な美に彩られて、私は如何なる屈辱の色の中にあるのか。

朱に、紫が犯され、次第に青が抜け落ちていく。

私の中の魔女である青が、セイバーに犯されていく。私もセイバーの様に淫らな赤に染まり、痴態を晒すのだろうか？ 策謀と邪計に長けたこの魔女である私が、熟した身体を持て余し、あまつさえ尻で感じる淫らな女に成り果てる――

何も嫌がることは、無いのではないのか？

最早清純と純情は装えぬ、であればいっそ堕ちて融けきった方が私のあり方に……

「く、はあ、ああ……」

だが、私は何かに縋って腰から融け落ちそうになる身体を支える。

私にはマスターが、宗一郎様がいる。あの方のために、いや、私の為、ただ一つ掴んだ奇

蹟を永遠にするために、私は為すべき全てを、諭えそれが抱きすべき外道の技であつても為さねばならぬ。永劫、我が名が魔女の誹りを受けてもいい、すでに神話の古より我が身に名声も体面もない、ただ有るとしたら私の微かな誇りは、宗一郎様に捧げていること——

その為に、まだ、私は私で有らねばならない。

「はあ……ぬるぬるになりました、マスターのアナルは。さあ、もつとほぐして差し上げます——」

セイバーの声は、私を玩弄する。

唇が離れた。あの軟体動物が粘つき絡むような舌の責め苦から解放される。

濡れた奥底の窄まりが、ぬつとなま暖かい空気の中で震えるのを感じる。それは少しでも腹部の力を入れると、中の物がはしたなくこぼれ落ちそうに緩んでいる——

そんな、軟らかい私の穴に、セイバーのあの乙女の細さと、朱色の蛇のいやらしさと、戦士のたくましさ帯びた指が宛られる。息を吸い、止める。

「ふああああああああああ——」

ずり、と肛門が指に蹂躪される。

忍び込んできたのは細い指。私の液とセイバーの汁にまみれ、ぬるぬるに湿ったあの指が私の中を犯す。肛門の敏感な内側に、ぬれそぼった布地が押し込まれる異物感。そしてその中に、淫らな意思を帯びたセイバーの指が、骨と肉がある。

「うっ、ああ……やめ……セイバー……はああ……」

「やはりマスターのこちらは処女なのですね。私の指を千切りそうなほどにきゆうきゆうと締め付けてきます——」

セイバーが私の事を言っている。くすくすと笑うのは、まるで愛玩動物を手ひどく可愛がっている残酷さ。片手でその頭を撫で、もう片手でその首を掻ききり屠殺する刃を隠している。そんな、生殺与奪を隠し持った心が寒くなる笑いだ。

でも、その笑いが私を興奮させる。奪われている、宗一郎様ではないこの紅いセイバーに私の身体が奪われている。それは肩を抱き、止まらぬ痛みが骨染みるのを悶えるように——それが髓に達すれば、快感になるのが怖い。

「感じているのですか？マスター——」

「ふ……ああ……く、ひい……ああ……」

肛門がぎちぎちと抜けられる。指一本であつたが、出すべき所に逆しまにねじ込まれているのだ。それは腰が千切れそうな痛みであつた。子を為す苦痛に比べればさしたるものではない、あれは苦痛などではなく、もはや死の間際でふらつく精神のぶれの痛みだ。だがそれとこの感覚は異なり、なまじ身体に張り付き、引つ張り、ずきずきと震えるので——

背中が踊る。脂汗が身体に浮かぶ、それは快感と苦痛の混じり、どちらに転べば楽になれるのか分からない、身体の悲鳴だ。肛門に突き刺さったセイバーの指が、ゆっくり……動き出す。

雖穴を抜けるように、私の肛門から内臓へと達するまで、深く——

舌が口から伸び、悲鳴になる。こうして体の中から何かを出さないと、容積が溢れてはんと腹が弾けそうな気がする。腰を掲げ、止めどもなくたらたらと秘裂が蜜を零すのが分かる。セイバーに見つめられる、私の秘所。

「おお……ああ……うああお……」

「ああだんだん感じ始めているのですか？ああ、貴女は魔女です、魔女なのにアナルで感じることが出来ないのは期待はずれです、せつかなのでここで、貴女のマスターを受け入れられるほどにほぐして上げましょう——」

宗一郎様が、私の肛門を犯す——

それは毒々しい紅い妄想であつた。あの逞しい宗一郎様が、深く私を愛してくれる。こんな淫らで卑しい私の穴をあの逞しい男根で貫き、私の中を満たしてくれる。宗一郎様との肛門性交ができる、それは私の耳に入った、セイバーの言葉の立てる邪な空想。

身体力が、抜けていく。我が身に満ちあふれた魔力も、枠も袋もなければ止めることは出来ない。顔は祭壇の濡れた石の上に横たえ、腕を垂らす。髪が頬に掛かり、汗で張り付く。ただセイバーに心も体も犯され、肛門を熱く疼かせて指に翻らされている。

「そうです、貴女はここでマスターを誘うのです。さあ、淫らで卑しいこの魔女の肛門を犯してください、と——こんなに濡らして、口を開いておまちしているのです、と——」

その声色が、私を惑わす。

セイバーの指が、増え——た。痛く、かゆく、快感に……

「はあああああああ——」

「こんなに、指一本も美味しそうにくわえ込んでいます、マスター……そう言って貴女は差すですよ、この乱れきったアナルを拡げ、自分の指を差し込み淫らに掻き回しながら、あの冷厳なマスターの瞳の前で乱れるのです。それが貴女の魔女としての姿ではないですか」

黙れ、という力もない。

セイバーの妄りな口で宗一郎様を汚されても、逆らう力もない。

いや、むしろそうして淫らな、卑しい女と成りながら痴愚の限りを尽くす私自身の姿に限らず興奮する。宗一郎様の黒曜石の瞳が、セイバーの緑鋼玉の瞳が、アーチャーの赤玉髓の瞳が乱れた私の痴態を見下ろす。その中で肛門と陰門に指をいれ、掻き回しながら求める、紫と赤の汚らしいマーブルにまみれた私。

震える。止めどもなく、このまま震えて石室の中で果てそうなほどに。

「あ、はあ、ああああ……」

「そも、貴女が魔女なのに、人並みにこちらで快感を得ようなどと言うことが笑止なのです」

「ひー……ぎいー」

陰門に突き立つ、セイバーの指。

とろけきり濡らし切った私の秘裂の奥の穴にめり込む指。それは指だけではなく、手首までねじ込もうとしているかのような激しい動き、愛撫ではなく私を懲らしめるような……

ぐしゃぐしゃと、激しくかき混ぜる音が身体の中を駆けめぐる。

「あつ、はああ、あああああ——や、やめ、セイバー……あああ——」

「まるで善男善女のように、閨房の中で男根をこの牝の穴でくわえ込むのが嬉しいのですか？ それほど貴女は世のあり方に、男女の交合は斯くあるべきだという観念にとらわれているのですか？ それほど愚かで有れば、私は貴女を諫めるためこうして……」

ぐぼぐぼと、肉が掻き回される。

私の臓腑の底で、セイバーの言葉の鞭と指の責めが入り交じり、抑えがたい快感と興奮に。身体が、神経が、脊髄と脳が紅く粘る血に浸る。さぶさぶと満ちる、牝の紅い血。

「ひ、が……ああ……うう……」

「ふ、こんなに私が指で貴女を懲らしめているのに、嬉しそうにひくつかせてだらだらと愛液を垂らし続ける——ああ、貴女はやはり魔女だ、こんなに責められても悦ぶ身体を持つておきながら、アナルで交わることを恐れるなど以外の外です」

膣から、手が抜かれる。蔑みの言葉なのか、それとも賞賛の言葉なのか。

セイバーが一体何をねじ込み、そして抜いたのか。考えるのも怖かった、それはそれを受け入れてしまう私の身体を知る恐怖でもある。そして、その間にも私の肛門は固くセイバーのアナルを噛んでいた。

「ほら、もう私の指を飲み込んで離しません。やはりマスターにはアナルで感じる身体なのです、こうして……ふ……」

「あ……ああ……くう……」

肛門の中で、うねる。

指の振る舞いは、淫らな蛇が奥を求めて蠢いているよう——時には引き、時にはねじ込み、二つの指が分かれて動いたかとおもうと、肛門に壁をなで上げる為に共に動いたりする。腰を掲げた私が出るのは、ただその指の動きに酔いしれ、吐息と嬌声を漏らすだけであった。

何が起きているのか。頭の中に紅い霞が掛かり、身体も長く伸びた神経から切れ切れの情報を受け取り、判別しているような。それなのに肛門にある指の動きだけが、延髄に突き刺さっているようにはつきり感じる。

「あ、はあ……ああ……」

「ここまで入れば、きつとマスターもこのアナルで迎え居られます……こんなに感じているのですから、怖いのですか？ アナルでおねだりすることを……淫らな魔女だと、尻穴で男を漁る女だと見られることが」

怖い、のか。

失うのが怖いのか。



違う、何も失いはしない。ただ、本当に変わってしまうのを、恐れている。  
魔女であるのではなく、魔女になることを。魔女である私はその殻の中にメディアという私がある、だが、魔女になり、淫らに尻穴で求めるほどになれば——割れて、しまう。

「う………はあ………」

「ご心配なく、マスター。私が貴女の僕としていますから、なので、ご自分に正直になつてにお求めください——さあ、宗一郎様」

——なぜ、その名を唱える

セイバーの言葉の最後は、私に放たれたものではなかった。

だが、セイバーの動きにただされるがままにされていた。なぜ宗一郎様の名前を口にするのか。いや、もしや、まさか——

その可能性、いや、快感に酔いしれ己を見失う間に、私はもしや……

目の前が昏くなる。その間に、私はセイバーに抱きかかえられた。  
セイバーが祭壇にすわり、その上に私が跨ぐような格好にさせられる。後ろになにかがいる、なのに振り替えれない。

「はっ、ああ、く、なに………ああああああー！」

「よくいらっしやいました、宗一郎様。お見苦しいところをお見せして恐縮です」

間違いない。そこに、いらっしやる……

いっそ気絶して、いえ死んでしまいたかった。セイバーの首に抱きつき後ろを振り返りたくない。私の背後にいらっしやるのは宗一郎様に間違いない。あの方はサーヴァントであるセイバーに淫らに籠絡され、裸で悦んでいた私を、驚かされていたのか。そして、どろどろに尻と太股を汚した今の私を眺めていらっしやるのか。

足音もなくいらした宗一郎様。

それは神をも呪いたくなるほど、悪しき時にいらっしやった。こんな淫らな私の姿を見られるくらいなら、絶えてしまいたい。

「……………」

「我がマスターの元の意向では、ここで乱れきって男を求める痴態を晒していたのは私の管

でした。すがいぎ運命の変転は占いがたく、今こうして乱れているのは——我がマスターです」

セイバーの声には得意そうで、そして甘く企む息に彩られていた。

今、こうして私を抱き上げている彼女の方が私よりよほど魔女の風格がある。だが彼女は魔女ではない、紅く転じた純粋な、攻撃の意思の姿。それが私を絡め取り、より一層の辱めを与えるべく宗一郎様に、私を——

「ひ………ああ………」

セイバーの手が、私の臀部をなで回す。

そしてその肉の丘を両手で掴んだかと思うと、宗一郎様に向けて、私の恥ずかしいところを——割り広げ、見せつける。身体がそのまま、ばりばりと引き裂かれるように。

「ふあああああああー！」

心の中に、絶望が満ちる。

私は両方の穴からだらりと淫液を垂らし、ひくつかせ、疼いていた。宗一郎様の目の前で、はしたなく、セイバーの指と舌に遊ばれ、一度は達しそして前後ともにほじられた秘所が露わにされる。

さらに容赦なく、セイバーの指が進む。

私の秘裂と、肛門に指が忍び込む。ずぶりと身体の内奥に入る、指の容赦のない進入。指が中に食い込み、そして臀部だけでなくこの私の穴の中まで拡げて見せようとするのか——

「やっ、やめ………セイバー………ああ………」

「ご覧ください宗一郎様。前も後ろもこんなにほぐれております………どちらでもお楽しみ頂けるかと思えます。さて、どちらでお楽しみになられるですか？」

セイバーは恐れを知らぬ口調で、宗一郎様に私を開いて見せた。

見られている。穴の奥まで宗一郎様のあの黒い瞳に見据えられている。その視線を感じる、私の内臓がどろどろと蜜を漏らして止まらない。セイバーの首を抱きしめ、この熱い体を持って余し、私は——

宗一郎様は答えない。ただ、そこに静かに在るのを感じる。  
セイバーはこういった、どちらでお楽しみに鳴られるのですか、と。それはこのくつろげられた私の双の穴の、どちらかでの性交を唆しているのである。

どちらで、私は愛されたいのであろうか？

もちろんそれは普段通りの箇所、宗一郎様を感じたかった。だがセイバーの指で言葉で辱められた肛門が疼く、ここまで馴染れながらも受け入れることが出来なければ、私の後ろの穴はその満たされない快感に毒され、いつも口を開けてたらたらと腸液を流し、宗一郎様を肛門で求める痴女に成りはてしてしまうのかも知れない。

いや、むしろ、恐ろしいのは――

「さあ……マスター、貴女からおっしゃってください……さもないと」

宗一郎様が――

「このままでは、貴女は――どちらでも愛されませんよ」

宗一郎様から、なにもしていただけないということ。

それは、私が狂う。宗一郎様にただ見つめられ、手も挙げて貰えない。戯れ言は止せ、と止められたとしてもこの身体は最早乱れ、熱され、戻ることが出来ない。いや、止めたとしても私はその命に従いかね、脚に縋り付いても愛の慈悲を求めらる。だろう。

そんな見窄らしい様を示せば、私は宗一郎様に軽蔑される。

人々に石以て終われ、魔女よ娼婦よ諍女よと詰られるのであればまだいい。何も言わず、あの蔽つた顔を背けられるのは、この身が潰されるのより辛い。それは私の出会った一つの、たった一つの奇蹟を私の手でみすみす失うこと。

迷う。息が絶え絶えに、なる。

そして、私に囁きかける、セイバーの声。耳にそれは密やかに満ちる。

「貴女は……どちらで愛されたいのですか？ ヴァギナで？ それもともアナルで？」

「私――は……」

セイバーの声。それに逆らえない。

いや、逆らうべきなにかをどこにも見つけられないから。紅い薔薇の花のようなセイバーに抱かれ、身体を揺られ、穴までこんなに見せつけられ、中から淫液を垂らして求めている。それなのに、求めないというのはあり得ない――耳に響く、セイバーの甘い声。

――怖いのですか？

「宗一郎……様……ください……私のお尻の穴を……犯してください……い……」

なにも、恐れる物はない。逆らう物もない。

私の肛門に、静かに宛られる固い肉根。宗一郎様の鉄のような男根、そして背中に感じる愛らしい気配、私は肛門を震るわせ、宗一郎様を迎える。

「――往くぞ」

それが、たった一言聞いた、宗一郎様の言葉であった。

耳が、脳が、意識が、魂が歓喜に震える。宗一郎様の言葉で私は処女の如く、抱かれる悦びに、迎える苦痛に、全ての時間と存在と感覚と肉体に感謝する。

「ああああ……ああああああー！」

肛門をめりめりと押し広げられることすら、この上もない快感だった。

背中の中のしかかる、厚い身体。宗一郎様のあの逞しい男根が、私の身体の中を貫く。肛門がセイバーの指以上に、しっかりとその太さを包み込む。内側から、身体の底にしみ通るような暖かさが広がる。

「はああっ、ああっああああー！」

私は身震いした。お尻を犯され、腸の中をかき混ぜられても感じていた。

いや、陸で宗一郎様を感じるときは、中に一杯に満たされる感覚に酔う。でもお尻を、内臓を犯されるとまるで私の魂がすべて宗一郎様に貫かれていくような、私の四肢が震えて止まらなくなるような官能。

「ああ、美しい……貴女はまさに私の美しい主人、この上も無き魔女です、マスター」

セイバーが、口付けする。私はそれをただ受け、快感の喘ぎを漏らし続ける。

そして、セイバーの指が、物欲しげに疼く私の膺の中に……

「うああっ、あああああ！ひゃあ、うっ、はっ、ううう！」

「前がお寂しそうです、私が慰めて差し上げます……ああ、中に感じます」

セイバーが満足そうに漏らす。私は後ろから、肛門を宗一郎様に犯され、挿すられる。ずっず、と後ろの身体の中を進み、退き、そして突く動きに、内臓が全て快感を覚える性器に成りはてたようにきゅんと震える。

「壁越しに、宗一郎様が動かれているのが……（っ）（っ）（っ）……」

「ふあ……ああ……ひい、ああっ、く……ああ……」

しっかりと私を抱く、宗一郎様の腕。

感じるはずはないと思っていた、私の肛門と直腸がああ宗一郎様に満たされ、その快感に悲鳴を上げそうに感じている。そして壁道の中にはセイバーの指があり、意地悪く私の中を責め上げる。彼女は私が悶える様を眺め、まるで手綱を操る様にその指で中の贅を撫でる。

「う……ああ……くっ、は、ああ、ああ……」

乱れる。淫猥な、嬌態を、ただこの身体に表す。

セイバーに据えられ、宗一郎様に抱かれ貫かれる。私は宗一郎様の腕の中で悶え、あの微かな香と汗の、目を閉じて抱きつきたくなる薫りの中で、女になる。いや、肛門を犯される私は陰門を犯される女ではなく、ただ宗一郎様を求める肉体と、心が脆く結び合わせれたモノであった。

「い……ああ……わた……し……宗一郎……さま……ま……」

その名に、身体に縋る。私を突き上げる鋭く激しく、そして優しい律動。

背中を波打たせ、私は喜びに全てを忘れる。魔女だと言うこと、女だということ、聖杯、望み、嘲りと裏切りの過去、永久に開けぬ未来、ただ、宗一郎様に抱かれる、身体全体で宗一郎様を受け入れられる、そしてお尻の穴ですら宗一郎様をつつみ、そしてこんな卑しい魔女の穴ですら慈悲を、愛をくださる宗一郎様だけを、私は泣きそうなほどに、愛している。

「宗一郎さま……ま……わた……たし……ああ、はあっ、あああああ！」

お慕い申し上げております。この身全てはすでに捧げ、我が心も――

その言葉の口には出来なかった。

身体が仰け反り、宗一郎様の腕に、固く、しっかりと、二度と離れぬほどに抱きしめられる。そして、私の一番奥に――どくり、と熱い精を頂く。溢れるほどに――

「は……ああ……ああ……」

幸せ、です。マスター

その言葉も、唇を動かせない。

私は二人の身体に抱かれ、そのまま、何も考えずにただ静かに腹の奥にある熱さを感じていた……

§

§

「……来たか」

そんな、低く唱えるような声を聞いた。

私は御影石の祭壇の上で、ゆっくりと体を起こす。教会の地下聖堂、そこで私はセイバーに手込めにされ、そして宗一郎様に後ろを貫かれ、愛された。

僅かな幸福、匙にすくえぬほどの幸福は、過ぎ去っていつて仕舞ったのか。それは宗一郎様の動じない声の、向こうにある何か物語っていた。

祭壇の上にいるのは、私。

その下には何時にも変わらぬ宗一郎様と、そして――銀と深紅の鎧に身を包んだセイバーが、いた。宗一郎様は全く動じない目を、そしてセイバーは緑の目を微かに喜ばせて私を見る。それは私を弄んだことを笑っているのではない。

いや、そんなことを二人はすでに忘れていた。

濃厚に感じる、戦の気配。

私は服をかき集め、この陣地の境界を確認する。紅い騎士は前衛に回した、今何が起こっているのか――

「マスター、とうとう至るべき来ました、最後の戦いが」

紅いセイバーが、唇を微笑ませる。強く、忌まわしく、そしてひどく頼もしい笑みであった。金の髪が燃えている。かつて見たセイバーの凛々しい強さとは異なる、見る者をして戦いの狂気に巻き込まずに入られぬ、滅びの終末に駆ける騎士の姿。銀の鎧は、猛威に輝く。彼女をして敗北に至らしめる何かはあつてならぬ、のであろうかと思わせるほど。

だが――

「く……」

瞬時にして状況を把握し、唇を噛む。

そう、最後の戦い。それは間違いない。ここで押し寄せる最後の敵がああヘラクレスなら恐れるに足りない。たとえそのマスターが聖杯を編み出せしアインツベルンの畜でも、戦力の差は圧倒的であり、破るのは容易い。

だが、攻めるのはヘラクレスではない。

サーヴァントは二体、そしてマスターもまた二人。

一体は姑息にこの聖杯戦争を嗅ぎ回っていた青い槍兵、ランサーのクー・フリーン。これだけであれば、ヘラクレスと結びついてもさしたる脅威ではない。今はアーチャーと戦いを繰り返して、技量と力は図らずも拮抗している。

だが、この聖堂に向かう、二人のマスターと一人のサーヴァント。

いや、一人のサーヴァントが問題であった。金、眩いほどの金、それは威圧される王者の輝き、サーヴァントでありながらそれを越えかねない威力を帯びていた。

あれは、危険だ。

あれを前にすれば私は鎧袖一触、例え万夫不当のヘラクレスですらもあれには脆くも崩れる。

「ああ、それは私の求婚者です、マスター」

「な………に？あれはサーヴァントではないのか？」

「ええ、先の聖杯戦争での我が最後の敵――アーチャーのギルガメッシュ」

ふ、と微笑んでさえ見せるセイバー。

先の聖杯戦争――そのようなことがあり得るのか。あれは八体目のサーヴァントではないのか？疑念は絶えぬが、今はそれを追求するときではない。私は衣を身に纏う。

とん、と緋と金のセイバーは籠手を拳で打つ。

「マスター。ギルガメッシュの相手は是非、私に。あの不遜な男の求婚を、あの男ごと叩ききる……これは譲れません、先の戦争よりの腐れた因業、この手の剣で断ち切って」

セイバーは傲慢に言い切る。何がセイバーにあるのかを知らぬ、だがこの深紅と銀の騎士王が、狂気の黄金王に遅れを取るものと思えない。

「勝手になさい、セイバー。だがあのサーヴァントのマスターは……」

「衛宮だ。共に速坂もいる」

いつ見たのか、宗一郎様がそうおっしゃる。

――嘘だ。あの戦いで坊やは死に、小娘は腕と魔術刻印を失ったのではないのか？

「マスター！ そのことを何故……」

「アーチャーが言っていた、かつての主と因果の矛盾、鉄の意を持ったはずの我が手で以てしてもそれを絶やすことは出来なかつたと……定めしあの男が、殺せずには助けたのか」

ひどく重要なことを、宗一郎様はこともなげに口にされた。

あのアーチャー、始末を任せたにもかかわらずこの体たらくか。奥歯を噛みしめるが、アーチャーはすでに戦いの中だ。いずれにしてもその過ちを問うことができるのかどうかは分かるものではない。

坊やが生き残り、ギルガメッシュのマスターとなった。それは陣地を進む力の流れで分かる。だが、小娘が……あの小娘の刻印を切り離し、不具にしたはず。それまで何故復讐を抱いて寄せ手に加わるのか。

探る。進む第三の姿を、陣地越しに読み取る。

違う。あれは小娘でありながら、最早小娘ではない。巨大な器、満たされぬ永劫の器

「――聖杯」

歯が鳴った。

そうだ、小娘、遠坂凜はすでに聖杯だ。失った魔術刻印以上の高密度巨大回路、この聖杯戦争の核心をその身に宿していた。分かるのは、遠坂凜には二つの心臓があり、異なる二つの脈に打ち震えている。一つは遠坂の家の心臓、もう一つは――アインツベルンの人工心臓、すなわち、届かざる人の手によって為された冒涇の人造聖遺物。

どこでか、それを遠坂凜は手に入れ、我が身に植え付け、聖杯となった。

それほどの、バケモノじみた魔術回路を手に入ればこの私に対抗しうる――いや、私を凌駕すると踏んで、この決戦に加わっているのだ、あの小娘は。

あのような物を身に埋め込めば蝕まれ三日も持つまい。だが、自壊の時は今ならず、時至る前に我らに復讐を為さんとしているのか。

その我が身を省みぬ執念は、魔術師としては――不覚ながら、認めざるを得ない。

だが、可笑しい。坊やも、小娘も、英雄王もセイバーも、赤と青の騎士も、そしてこの私も。勝利を確信した喜悅ゆえではない、ここまで皮肉にも戦いの歯車が合い、聖杯は飽くまで

諍いを望み、その諍いにこそ私は在り方を見いだすことを。  
なんという皮肉、なんという奇縁、なんという運命――

「は、はは……いいでしょう、これで全てが揃ったと言うことですね……これで器を探す手間が省けました、坊やと小娘の執念深さには、むしろ感謝したいくらいだわ」

外套を掛け、フードに顔を隠す。

そうだ、これが最後の戦いか。

セイバーは不遜な、宗一郎様は不動の、そして私は魔女の笑みを浮かべる。そうだ、最早この身は全て、魔女なのだ。ならなその全てを、今求めて運命に逆らおう――

死しても、滅びても、何も恐れない。

我が死と栄光は、宗一郎様と共にあるのだから。

「征きませう、宗一郎様。三度目もないことをあの愚か者達に教えてあげましょう」

「……………」

宗一郎様は無言であった。私は宗一郎様の背中を追う。

ああ、魔女として私は、この戦争を戦い、勝つ。ひび割れた器の底の紅い澱が、全てを裏切り世界を造る。それが魔女の、キャスターのメディア、そして宗一郎様を身も心も、全てを捧げて愛した一人の愚かな女の行き着く果てだ。その先に何もなくていい、何もないからこそ、そこに、辿り着きたい。

唇が緩む。笑いが漏れる。手に握る刃が、世の全てを嘲笑い、捻れる。

――魔女は笑う、紅く赤く朱く、染まって。

《END》

無視して延々と



なれれば  
とんぱでも  
ないんですよ







Lin toosaka



(たちばな)

# 胸次第

阿羅本 景  
イラスト 羽音るな

「……桜ちゃん、やつぱり」

藤ねえが箸をくわえながら、もぐもぐとしている。

喋るのは良いけどもちゃんと言の中のもの飲み込め、と思う。そのライダーを見ろ、箸を使うキヤリアなんか藤ねえの二十分の一以下なのに、会席料理に連れて行っても恥ずかしくないほどに行儀正しいだろう、と。

そんな人の模範にならない教師・藤村大河がごっくん、とようやく鳥つくねを飲み込んで口を開く。桜ははい？と藤ねえの言葉に聞き入っている。

笑顔が柔和で瑞々しい、綺麗な桜の顔。その横顔に見入っている俺は箸を止めてしばし話に聞き入る。

「やつぱり胸、おつきいねえ」

——いや、その、食事の場でチミは何をネタにする、このタイガの分際で。

桜の顔がかあぁ、と紅く染まっていく。顎を引いて目が藤ねえからどこかに迷う、で、そのまま俺を向かれても困るんだ、桜俺も視線を感じると頭に血がのぼせてやつぱり視線をそらして机の上の温泉卵と鳥つくねを凝視する。

うむ、焼き色もこんがりときつね色で実によい、この君のどろっとした感じが黄色系の食欲をそそる暖色系の組み合わせで、それにレタスの青さがとアスパラガスが実に良い感じに——

「せ、先輩！ 何とか言ってください！」

「えー、なんでさー、き、聞かれたのは桜でしょ？」

藤ねえに言い返さないでいきなり俺に話を振ってきた桜に慌てて答えた。

桜と藤ねえの間の胸に関する女の子の他愛のない話題が始まり、俺が益々赤面してそこでおもむろに話を聞かれてびっくり、という展開なのに、桜はいきなり台本を巻きに掛かっている……感じだ。

「だって……先輩、目がえっちです」

桜が頬を紅く染めながら、そんな事を俺に告げてくる。いやその、桜を見ていてその目がえっちですと言われると四六時中俺が桜を情欲に満ちた瞳で見つめてるって言うことに……いや、桜は魅力的で、すごく可愛いんだ。それは否定のしようがないし、桜とそういう関係になることも……あの包み込まれ、溶かされるような感覚はいつも俺の脳裏にある。

……だからといわれて、藤ねえの前でえっちだと言われるのは、きつい。

「そうよねえ、土郎はえっちだからねえ」

「な、な、なんですか！ 育ての姉たるあなたもそんなこといいますか？」

「いやあ、育てのおねーさんとしてはうれしいのよ、これがねえ」

はむはむ、とご飯を掻き込みみずみずとみそ汁で流し込む藤ねえ。何気なくすごいことを言いながらここまで健康な様子を見せられると、桜や藤ねえの片言隻句で動揺する俺が馬鹿みたいに思えてくる。だけど、俺のえっち宣言に嘔みつく人がいる。

ライダーの筈はない。彼女は常に目をつぶって静かに食事をしていた。

「なんで、先輩がえっちで藤村先生がうれしいんですか！」

桜。なにかこう、俺並みに出てくる発言全てに「反応する構え」というか……目が怒ってそれで僅かに潤んでいると、俺は済まないことをしてるとんじやないのかなあ、と思うんだけど。藤ねえはそんな嘔みつかれる桜を、にま、と嬉しそうに見つめる。虎の前に子兎出現というところだろうか。桜と藤ねえの相性はやつぱり藤ねえに分があって、良いオモチャに桜がなってしまう。

——ライダー、助けてやれっつ

アイコンタクトをライダーに取るうとするけども、彼女は目をつぶったまま食事をしてる。ライダーと藤ねえだとライダーの方が圧倒的に優勢だ。ライダーとか遠坂とか、そう

いう冷徹で鉄面皮の持ち主だと喜怒哀楽の起伏の激しい藤ねえは苦戦する。

でも、ライダーは俺を無視していた。うむ……もしかして桜の成長を彼女なりにを願っているんだろう？

しかし、昔は目隠しをしていたから平気だったとはいえ、目を閉じて平然と食事をしているのは奇妙な情景だ。ライダーのこれは。

「うれしいよー、桜ちゃん。だって士郎がりっぱな男の子になったんだよ」

「……それはどういう意味ですか」

「士郎は子供の頃から女の子に興味が無いにぶちかたねえ、切嗣さんも士郎は甲斐性を持って欲しいけど正義感の方が先に立つな、とかやる気なさげでお姉さんはずつと士郎のことが心配で気を探んでいたのよう？」

袖を摘んでよよよ、と泣き崩れる真似をする藤ねえ。

なんで泣くんだよ藤ねえが、と俺が苦り切つて箸を噛む。嘘だ、人の部屋の押し入れの中のエロ本を探り当ててリスト作製しているような所業を心配していたとは言わない、あれは思春期の傷つきやすい男の子の心に疵を残す悪鬼羅刹の如き残虐行爲だ。

でも、そんな表情を知るはずもない桜がえう？と驚きを露わにする。

……だから、桜、藤ねえに騙されるなって、付き合ひ短くないのに……

「そ、そうなんですか？」

「そうなのよ。でも桜ちゃんが通ってくれるようになって少しは士郎も年頃の男の子らしくなってきた、それでもちよつと唐変木っぽかったけどもセイバーちゃんとか遠坂さんとかライダーちゃんとか一気に入郎の回りに花開いてとうとう士郎も春の目覚めか啓蟄かってお姉さん嬉しくて嬉しくてー」

……嘘だろ、藤ねえ、話作りすぎ。

セイバーに嘔みつきこてんばんにされ、遠坂にねじ込まれ、ライダーに薄く笑って一瞥されて抗弁の余地がなかった藤ねえの解釈とは思えない。というか、俺の回りに花開いたってなんだよそれ。

——言葉通りの意味？

でも、桜もその解釈したらしく、俺の恥づかしい話にやりどころがなく困ったように目をおろおろと迷わせる。胸の前に箸を握ってぎゅつと硬く震えていた。

それが少し可哀想で、手を伸ばして桜の肩を叩きたい。桜が心配するようなことは何もな

いんだって。

「で、でも……それは衛宮先輩が素敵な方で、当然の帰結なんじゃないかと……」

「でも、やっぱり桜ちゃんが居てくれたお陰で士郎も一人前の男の子になったんだよ。切嗣さんの墓前に報告しなくちゃねえ」

「……勘弁してくれ」

袖でござい偽涙を目頭を拭う藤ねえに、短く言い返す。

墓前で報告って、俺をオヤジになんて言わせるつもりかあんた……オヤジに増して俺がターボひょうろくだまになったって言うのかよ。

——しかし桜が俺を素敵だって言ってくれるのはうれいけども、そんなタマじゃないし……こまったな、藤ねえに言いたいことを言い返すと桜に誤解されるみたいで、言いづらい。

桜は少し俯き加減に俺を見つめてきている。瞳が温かく、少し口元が笑っている。よせ、そんな目で見られると照れる——と手を振って掻き消したかった。どうにも恥づかしい、桜に見つめられると。

「でも、やっぱりそれは桜ちゃんの胸が大きかったからだと思おうの」「ばかもの——話をそこに持っていくなああ！」

俺が絶叫した。そりや、感動的な話をそんな風に妙な方向に持っていければ当たり前だ。ライダーは俺が叫んでも全く動じない、まるで禅僧の食事みたいな様子。藤ねえがむ、と俺に向き直る。背後にこみかると虎のオーラを背負っているが、恐れるまでもない。返り討ちにして今日こそはバターにしてくれるぞこの馬鹿虎め。

「だって！ だって桜ちゃんのおっぱいがどーんって大きくなかったら士郎はどしたのよー」「女の子の可愛さと胸の大きさは関係ないっ！ そんなこと言ったら桜の胸がAカップだったとしても俺は桜が好きだったんだし！ まったく女性の藤ねえがそんな低俗な価値観の言動をするなってーの」

胸の小さな桜というのを想像しようとする、なぜか遠坂が脳裏をよぎるがそんなことはいちいち口に出す気はない。どうも、女の子の鷹揚さが胸の大きさに左右されているような印象が……気のせいかな。

藤ねえが俺にやりこめられきゆう、と言うかと思いきや、だつてだつて、と腕を振っている。

「ちがうもん、女の子にとつても胸が大きいのは重要なんだよ」

「……なのかね」

「だつて、胸が大きい方が可愛く見える服は多いし、水着とかも綺麗に見えるし、やっぱりアルファベットはEかF辺りがいいわね、うん、胸が大きければ女の子は人生勝つたも同然なの！」

がおー！と藤ねえが吠えた。

人生勝つたも同然つて……男の俺には分からないけども、まくし立てる藤ねえの様子を見ると強ち嘘を付いている訳ではないようだ。たしかにあつた方がこう、曲線美が……とちらつと桜を見る。決して桜の胸を見た訳じゃない。

「……………」

……その勝つたも同然と言われたご当人は、紅くなって俯いている。

いや俺と藤ねえがそんな恥知らずにぎゃんぎゃん言い合つていれば、その分の羞恥を覚えるのは聞いている桜になつてしまつていたようだ。うあ、すまね……といつて俺は頭を掻いて謝つた。

桜がぼそぼそと喋る。その言葉を聞き逃すまいと、前のめりになつて聞き耳を立てる。

「なに？」 桜

「……先輩は謝ることはありません。その……先輩は、胸が大きな娘は好きなのですか？」

——ぼん、と頭の中で弁が外れたような気がした。

こんなことをしている間にも、頭の中の蒸気がふしゅふしゅと抜けていつてしまふ。桜の質問は取りも直さず桜のおっぱいが好きなのか？というのであつて、それをライダーや藤ねえの前で答えるというのは、恥ずかしい。

いや、桜と二人つきりだつたとしても頭がおかしくなりそうに恥ずかしいだろう。

だつて桜のあの服の下にははちきれんがばかりの身体があつて、ぶるんたゆんと……それを嫌いな筈はありやうがないけど、それだと俺が桜の身体だけが好きみたいで、そう答えてしまうのが陋劣のやうで悔しい。

ふーはーふーはー、と息を吐く。とりあえずみそ汁を掴んで、喉に流し込んで落ち着こうとする。合わせ味噌と昆布出汁と絹ごし豆腐が流れ込んでくるのを感じて、それで……

「俺は好きだぞ、桜の胸は。胸や身体だけじゃなくて桜全部が」

「……………」

桜が喜ぶかと思つたら、ぎゅーつともつと身体を縮こまらせている。

正座して、膝の上に手を着いて、俯いて——怒られて萎縮しているみたいだけど、違う。桜がどうしちやつていているのが分からない。もしかして嬉しいのかも……

嬉しいから、どう振る舞つて良いのか分からないからなのか。それだとしたらすごく、桜の仕草は可愛らしい。抱きしめたいほどに。

「ふううん、いいねえ、やつぱり胸が大きい女の子は人生勝つものよね……」

藤ねえがそんなことを言うけども、からかっているんじゃないかとなく人生の哀愁を漂わせているやうな……藤ねえの胸だつてそんな、桜を悔しがる程じゃないと思うんだけど。

藤ねえはぎしゅぎしゅと皿の上のつくねと野菜と、古漬けを平らげていく。それが腹立ち紛れなのか哀しんでいるんだか、見当が付かない。そして口に含んだままで言う。

「私も胸が大きかったらなあ、士郎もおねえちゃん、とか懐いてくれたのになー」

「悲観するものではありませんよ？タイガ」

——え？

俺は目を丸くする。そして、桜も硬直圧縮の桜も顔を上げた。

今まで沈黙の内に食事をしていたライダーが、お箸を挟んで両手を合わせて一礼していた。その格好のまま、誰も予期していないところで言葉を返す。

難敵の出現で藤ねえの顔色が変わる。虎が龍にあつてたじろぐやうな。

今の言葉も深い意味は無かつたに違いない。はいはい、と俺も流すつもりだつたし、桜も反応できない筈でも、そこを狙つたやうにライダーが話しかけていた。

食卓の注目は、ライダーに集まる。

彼女の目の前のお皿も綺麗に片づけられていた。凶らずも藤ねえとライダーは共に食事を終えていた……まるで、謀ったように。何をライダーが謀ったのかは不明だけど。

「え、その、なに？ライダーちゃん」

「ですから、悲観するものではないと言ったのです」

ライダーが目を開く。眼鏡の向こうに、あの貴石の目を背けたい瞳が輝いている。

その魔眼は眼鏡で封じられていたけども、藤ねえに向けてしまえばなまじの人間を釘付けにするくらい力はある。哀れしぜんどうぶつであるところの藤ねえは、超自然的存在のライダーの前で手も足も出ない有様になっている。

嗤うライダー。唇の笑みは妖艶で、脊髄が痺れるような。

手が伸びてきて、ぎゅーと膝の辺りを掴まれる。め、と桜が目で見とれた俺を怒っていたけど、そうでないと横から見ている俺も連れて行かれてしまいそうな瞳だった。

ん、と無言で応えた。でも、ライダーと藤ねえの会話は気になる。

「その、わ、私、悲観なんかしてないよーやだあライダーちゃんったら」

「私の耳にはそういう風に聞こえましたか？ 胸が大きければ士郎を誘惑できた、と」

ライダー！と今度は窄めそうになる桜を見つめ、その機先を制する。

桜にとってはその会話の内容は穏やかではないけど、ここで邪魔したら面白い物を見損なう予感がしている。小声でひそりと桜に伝える。

「桜、ほら、ライダーが藤ねえ虐めしてるだから」

「え、そ？ そう……」

ライダーの藤ねえ虐め。その言葉に桜は戸惑っているようだった。

その気持ちは分かる。ライダーは桜のサーヴァントで、それが恩師である藤ねえを攻撃しなければ仁義として止めるべきだろう。でも、藤ねえの今の状況は自業自得だ。

うん、と俺は一回頭を縦に振る。だからやらせてやれ、と。

藤ねえに目を注ぐと、哀れ虎は強敵の前で手も足も出ず、がお、がお、と力弱く震えて吠え

るばかり。そう思うほどにたらたら冷や汗を垂らしているのが分かる藤ねえの窮状。ライダーは指を唇に当て、その笑いに、と小さく体を動かす。

でも、そんな僅かな動きでもがおー！と空吠えして藤ねえは威嚇せざるを得ない。哀れ、タイガー！

「な、懐くのつていうのは誘惑じゃないようライダーちゃんー、うわあぁん藤ねえー、とかそんな士郎をよしよして胸でぎゅーとして上げたいとかそーゆーのでー」

「その後どうするんですか？もし胸が大きかったらそのまま士郎を抱き続けるのですか？」

うわあ、意地悪、ライダー！

最近桜の良いお姉さんになっているので忘れていたけど、ライダーは元々底意地の悪さ

があったことを思い出した。真面目であるがゆえに物事を忍せにせず、それが人が迂回したかったり忘れたかったりするところで発揮されると決るように底意地が悪いという形になる、という厄介さ。

だら、と藤ねえが冷汗にまみれる。南無南無。

「そんなこともこんなこともないよー、だって士郎だよ？ 弟みたいなものなのに」

「そうですね、士郎はタイガにとって弟みたいなものですね」

ふ、とライダーの唇が歪む。相も変わらず弄ぶような笑みで、横から見ている俺でも心惑

わされる色香があった。この場に俺だけが男性でそう感じるのかもしれないけど、桜もライダーをおろおろと困った瞳で見つめているからまあ……無理もないのか。

もうこうなったら俺や桜じゃ止められないな、と感じる。そうなる……

「……………」

二人とも、目の前で繰り返られるライダーと藤ねえの会話を見てみないふりをしながら、静かに食事を再開した。俯きがちで、なにか気まずい痴話喧嘩を聞かされて恥ずかしがるカップルみたい……。

「そう、ですが……兄妹や姉弟、そしてや母息子といった近親関係からは、時に倒錯的身を滅ぼすように甘美な関係が生まれることがあるのですよ？ タイガ」

「な、な、な……」

藤ねえが絶句している。

無理もない、俺もご飯を噛みながら何も考えられないんだから。ライダーはあのハスキーな声でとんでもないことを言った、近親相姦は甘美で倒錯的だつて。そりゃあオイディプス王のお国の人間だからそういうかも知れないけど、そ、それは……

藤ねえの目が点だ。口元が一直線に引き結ばれて困り切っている模様……

「たしかに近親相姦は許されざる罪ですが、幸い士郎とタイガは血縁関係では他人同士ですからね。それなのに姉弟も同然だということであれば禁じる者は誰一人としていないのですから、さぞやその情欲の炎は燃え上がることでしょう」

淡々と、穏やかなほどにライダーは言うけども、聞いている人間の穏やかじゃなさつたらない。馬鹿なことを言うなよライダー、藤ねえだそうそれをそんなことやこんなことをするというのは冗談じゃない……つて割り切るほどでもないし、いや、藤ねえは確実に綺麗な俺に構つてて良いのかなと不安になる事はあつたけども……

……いかん、俺まで動揺してどうする。

僅かに肩を揺すつて笑うライダー。俺と藤ねえをからかつてよっぽど面白いのか……それに桜まで動揺させているのに気が付いているんだらうか。二人とももうそろそろ箸を付ける先が無くなり、このまま見て見ぬふりを続けると延々と古漬けを摘む羽目になる。

「……………そ、それはない、それはないんだから、だって士郎だよ？」

「そうです、今のタイガがタイガのままではそうなのかも知れません。ですが……」

ライダーが立ち上がった。背の高い彼女が立ち上がると当然みんな見上げてしまい、そしてそのまま藤ねえの後ろに回り込むのを見守っていた。いや、後ろに回り込まれる藤ねえ当人まで……あ、あんなに簡単に藤ねえが後ろを取られるとは。

まるでそよ風が流れるようにごく自然にライダーは藤ねえの背後を取り、そのまま座り込む。剣道の有段者で居合の型もやっつてはるはずの藤ねえから、あまりにも何事もなかったかのように。え？と俺が漏らした言葉で初めて藤ねえはバックを取られたことを気が付いたみたいだった……いや、何をするん気？

「な、な、何するのライダー！ちやああん！」

俺と桜が見守る前で、ライダーは大胆にも、藤ねえの胸を揉んでいた。後ろから手を回し、身体を密着させてびたつと張り付いたライダーの手が、藤ねえの胸を掴んでいる。そんな真似をすると大概の輩は六大地獄バック旅行ご招待間違いなしなのに、ライダーはじつにあつさりど、胸に触れている。

……目のやり場に困るな、これ。

ライダーの手が、スリッパドレスの上から藤ねえの胸の丘を宛われていた。そしてそれがさわりと、と指で持ち上げるようにして揉む……ライダーが何を思つてそんなことをしているんだかさっぱりで。

「この胸がもっと大きく、タイガがもっと魅惑的であればあの朴念仁の唐変木の士郎であっても貴女に迷ったことでしょうね。世間が禁じない姉と弟、それはさぞ耽美な交わりとなるでしょう。もつとも今は士郎は桜のものです……タイガ？」

ライダーの言葉は誘惑の色に染まっていた。でも、何でそんなことをするんだらうか。くすぐったいのか気持ちいいのか、ライダーの腕の中で藤ねえが身体をくねらせていた。多分やり慣れないことをされているので気味悪いんだらう、きつと。

さわさわさわ、とライダーは藤ねえの胸を触る。いやらしい手つき。

桜はやっぱライダーを止めようとしていているけど、恥ずかしすぎて声が上がらない様子でじーっと空になったお茶碗に目を注いでいた。俺はおろおろとするばかり。

「この身体、未だ熟さず花開き切らぬ事に悲観することはありません、こうして慈しみ手を入れていればもつとタイガは美しくなりますよ……さて」

ライダーが、藤ねえを抱えたまますつくと立ち上がる。

藤ねえの足が、ぶらーんと宙に浮く。

え？と首を傾げる。確かにライダーは力はあるけど、後ろから藤ねえを抱きかかえて起立し、あまつさえ藤ねえの足を浮いていた……上背の差はあつても、いざ抱きかかえて微笑むライダーを見るとなんといいのかわからない。

抱え上げられた瞬間は反応がない藤ねえが、ようやく状況を把握してじたばたと暴れる。



でもライダーの腕は綱の様に押さえつけている。サーヴァントを舐めちゃいけない、藤ねえ、昔俺もいろいろひどい目にあっただんだ。

「うわああ！ 浮いてる！ 浮いてるの！ このままジャーマン！ ジャーマンのおおー！」

「……ジャーマンとは何ですか？ 土郎？」

「ジャーマンスープレックスのこと、そのままブリッジで後ろ投げるカール・ゴッチの……いや、スープレックスはするな、ライダー」

藤ねえの世迷い言の意味を尋ねてきたライダーについて律儀に答えしまった。ライダーが藤ねえをジャーマンスープレックスするのは容易いが、すると藤ねえが昇天する恐れがあるし、まだ食卓は片ついてないから、止めろというしかない。

なるほど、と眼鏡の顔が頷く。腕にだっ子を抱いたライダーは俺と桜に、妖しい余裕に満ちた笑みを投げかけ、そしてこんな言葉を掛けてくる。

「さて、お二方の目の前でするのは憚りますので。私たちのことはお気になさらずにごゆっくり食後のお茶をお楽しみください」

憚ることって何を指すの？ と聞きたいけど聞けなかった。あんなに胸を触ってえっちな雰囲気醸し出していたんだから二人っきりになったらどうするんだろう……ああ、頭に血が上ってくる。こう鼻を押さえて項をとんとんと叩いて鼻血を抑えたいような、つーんと来る感じ。

藤ねえがへるぷみーへぷみー、S.O.S.と激しく救いを求めて手を振り足を蹴り暴れている。だが藤ねえ、もうS.O.S.は国際救命信号じゃなくなったから俺には届かないんだ……桜にも残念ながら、ほら、下向いているし。

「いやああ！ 土郎！ たすけてー！ ライダーちゃんにえっちなことされちゃうううう！」

「……するの？ ライダー？」

「してもよろしいのでしたら、致しますが？」

なんとも微妙な答えをするライダー。そっちの方がすごく淫靡で、ツボを心得ているという感じで……ライダーのあの口調だったらすごいことになるんだろうな、と想像してしまう。腕組みする。ここで藤ねえに恩を売っておくべきか、それともライダーの恣に任せるのか。しばし考えた末、俺は答える。

「……その辺はライダーのお好みで」

「了解しました、ふふふ、楽しみですねタイガ、貴女を見違えるように美しくしてさしあげますよ……」

「うわあああん、土郎の裏切りものー！ 桜ちゃんたすけてえええ！」

お、一番この場で影響力のある人間にようやく藤ねえも気が付いたらしい。

桜は、ゆっくりと顔を上げて……止めて、ライダー、と一言言えはすぐに解放されるだろう。でも、桜はライダーの腕の中でふはふはと肩で息をしながら危機に怯える藤ねえを、そしてある種の間違った頼もしさを感じさせるライダーを続けざまに見つめていた。

「……藤村先生……」

「桜ちゃん！」

「ごめんなさいっ！」

「えええええー！」

意外な回答だった。いや、桜なら流石に藤ねえを助けると思ったんだけど、この決定は俺も思わず叫んでしまった。ごめんなさい、と言った後で……こりこりと桜は微笑んだ。

なんで？ と俺が目で見問う。万策尽きた藤ねえが腕に引つかかかって、ぽかーんとしている。

「だって……ライダーもいろいろ構って上げられないから……だからそれで藤村先生も綺麗で胸が大きくなれば一石二鳥です。それに、こう見えてもライダーってすごく上手いんですよ？ 先生」

……そんな引き出しが桜にあったのか、と思うちょっと意地悪な振舞いだった。

実にあっさり恩師と顧問を売ったな、と思わず感心してしまう。上手いんですよ？ と言われたライダーが得意満面の顔で頷く。ああ、すごくインモラルな空間だ、衛宮家の食卓がソドムの市になってしまったようです。

俺はおそろおそろ桜に尋ねる。

「……桜、ライダーが上手いなって……何？」

「え？ そ、そんなこと私に聞かないでくださいっ！」

「なんなのよう！ 何が上手なのよう！ おねえさん貞操のびんちなのには土郎はなにどっきびつくりで幸せごっこを桜ちゃんとしているのよう！ って私本当になにされるのようー！」

「それはですね、タイガ。後でじっくりと身体に教えて差し上げます……ふふふ」

あー、もういやらしいなあ、ライダーは。

俺は箸を置き、ご馳走様でした、と頭を下げる。なんとなくそれは藤ねえの菩提を弔っているような感じがするのだけでも……まあ、馬鹿なことを言っただけで墓穴を掘ったのは藤ねえだから仕方あるまいて。

「藤ねえ……あれだ、おっぱいが大きくなっても、俺にとつての藤ねえは藤ねえのまま。一朝一夕でカップじゃ変わらないから安心してくれ！」

「なにばかいつてるのよ士郎！、そこで合掌しないでよねーちゃんの危機を助けなさいっ！ 後でひどい目に遭わせてやるんだからうわああああん！」

「……そうですね、遭うのはひどい目ではなく素敵な体験にしてあげますよ……タイガ」

楽しそうだなライダー、いいぞもつとやれ、と俺は頼もしく頷く。

このなんともえつちな光景に桜は顔が真っ赤だし、えつちな雰囲気の中に巻き込まれた藤ねえは真っ青だ。ライダーは抱え上げたままぐるぐる踵を返す。紫の長い髪がふわりと背中に流れた。

「それでは、タイガをお借りします」

「当分返さなくていいぞー」

「その、藤村先生……ライダーは痛いことはしないと信じていますから、その……リラックスしてくださいね？」

「うわあああん！ 人間の性、悪なりっ！」

この世の真理を絶叫して、藤ねえは消えていった。

……いや、ライダーに抱きかかえられて強制連行。あの藤ねえの馬鹿話からこんな展開になるとは予期もしていなかった。

どすどすと廊下の床板が鳴って、ライダーが藤ねえを連れて行く。どの部屋に連れて行くんだかま……

「……行っちゃいましたね、藤村先生とライダー」

「ああ……行っちゃったなあ、どうなるのかなあ」

かくして居間に残されたのは四人分の空の食器と、俺と桜。

二人ともなんとも言い難い空気が漂っていた。それは藤ねえを売ってしまった慚愧の念というわけでもなく、これからどんなあの人二人にえつちなことが繰り広げられるのかという想像の興奮でもなく、こう……困ったな、と。

二人で顔を見合わせる。藤ねえとライダーが居なくなったから、ひどく静かだ。

桜の顔は朱が引いて、満ち足りた安堵を感じる。線が柔らかく、手の触れるとほわりと柔らかい感じがする美しさ。頬が柔らかく、鼻梁と目が優しく、官能的で、いつも目を奪われる桜の花開いた美しさ。

ああ、いいな、と。それは穏やかに感じさせてくれる、桜の充足感だ。

俺はよっこらしよ、と腰を上げた。

「桜……お茶、煎れようか」

「はい、あの、ライダーと藤村先生の分も……あとで差し入れます」

「差し入れて……もしかして、桜、興味あるから覗くの？」

意地悪だな、と思いつい聞いてしまふ。

桜はしば、とちがいますとばかりに手を動かす。でも胸の前で手を握って、俺に求めてくるような瞳を向けてきて——僅かに湿ったような、肌の感覚がした。

「……先輩も、ライダーがどうするか、藤村先生がどうなるのか……見たんですか？」

「ああ、いや、それは見ちゃだめだろ、なんかその……我慢できなくなったら事だし」

「大丈夫です、私が先輩を鎮めてあげますから……」

……そんな、魅惑的すぎることを言わないで欲しい、桜。

俺はぶんぶんぶんぶん、と大きく首を振る。こうして頭の中の妄念を振り払って少しでも落ち着け、と思いつながら。桜もびっくりしていたけど、ぐっと何かを飲み込んで明るい顔になっていた。頭がぐらくらするけども、とりあえず落ち着いて喋る俺。

「ま、まだそーゆーことをあーしてこーしたりするには時間が早いぞ、桜」

「そ、そうですよ先輩、あは……そうだ、梨を剥きますね？ 四人分ですよ」

「自棄食いの一人いるから多めにした方がよい。俺も手伝う」

「はい、先輩」

《おしまい》

士郎を助けた  
ライダーをおしおきする  
黒桜の図々

ドクッ

ドクッ

「8回目～、まだまだ許しませんよ？ライダー…ふふ」

# リーゼリット

「たのんじゃう」



いちめどー

# 編集後記

## 阿羅本 景

どうも、眠月舎の阿羅本です。今回の同人誌もお楽しみ頂けましたでしょうか？

早いもので眠月舎から出すFateのSS本も2冊目でございませう。Fateが出て半年で2冊というのはいろいろなイベントに出ているのに比べると少ないと言えは少ない様であり、月姫の頃はもっとのべつ幕無し出していた様な感じがするのですが、それでも結構なペースであるとおもいます。

と言うわけで、今回も阿羅本のSSを中心に2本の作品を収録してお送りしております。解題というか後書きになりますが、1本目の『赤く笑う』今回のメインとなる作品でございませう。

えーっと、セイバー×キャスターという「ぶっちゃけあり得ない」カップリング？なんですけど……逆は良くある、というか聖女陵辱はデフォルトなんですけどね(笑)。ただキャスターがセイバーさんのアナル蹂躪係ばかりであるというパターンに不満があり、さらに「キャスター若奥様は魔女」なお茶目キャラが定着していたのでこう、ひっくり返したい……という欲望をむらむらと抱えたまま書き始めたものでした(笑)

で、それをどういう風にするのか……と言うところに辿り着くまでが大変でした、ランサーに助けられない状況で教会に特攻すると素敵なぐらい救いのない状況が現出されておりました、これだと……鬼の所業ですな、私も(笑)。

で、そこで反転赤セイバーさんにしてキャスターをせめてせめてせめまくる、という魅惑の展開に……元々セイバーさんって攻めだと思っし、キャスターの聖女陵辱も強がりであるような気がしたので二人ともノリノリな三に……どちらかというときキャスターさん翻弄されっぱなし、精バーさん愉しみっぱなし(笑)

そこで終わる予定だったのですが……ラストの部分はどうもまとまりが悪いなとおもって序盤の状況から考えられる最終決戦を考えてみたのですが、どうにも、そこが燃えるという別SSの趣が……だってギルガメッシュ、赤セイバー/鉄の心士郎、葛木/聖杯凍、キャスターなんて拮抗した燃え燃えの戦いが……そして最後のキャスターさんが、さつきまで

お尻でやられてた人？という感じに……一体何書いてるんでしょね、私(笑)

これにドキドキするくらい妖しいセイバーのイラストを入れて貰った火星田レイ子さんには大感謝です。ああ、楽しそうだなあセイバーさん(笑)。

2本目はまったく桜のいる食卓、すね……いや、まったくたりたり。

こう、大河の無茶に絡むライダーが書きたかったというのが発端です。でもライダーさんは大河にえっちはしない……しないのか……いや、することは全部さらっとし(笑)。あと、それを眺めるばかりぶるの桜と士郎のほのぼのさが描けていればいいな、と思ったのでした。何処にも翳りが無く幸せな者を書きたいと……えろもいいのですが、実に魅惑的

で。こちら羽音るなさんの素敵なイラストをいただき、真に有り難く思います。

4コマをいただきました緋瀬るなさん、イラストをいただきましたPonyさん、皇征介さん、いちめどーさん、たはなさんにも感謝でございます。それと、表紙をいつも頂いている九十珠歩鳥さんにも感謝感謝です。

今回の同人誌も、皆様にお手に執って頂きまことにありがとうございます。また次の同人誌でお会いできると有り難く存じますので、是非とも宜しくお願いします。

でわでわ!!

## FateSeeker vol.2

---

2004年8月15日 第一版発行

制 作	『睨月舎』
発 行 人	阿羅本 景
編 集	保谷渡辺工房

---

発 行 所	睨月舎／Moongazer
-------	---------------

〒202-0005 東京都西東京市住吉町4-4-21 渡辺方

Mail:QYK02345@nifty.ne.jp

HomePage:<http://moongazer.f-o-r.net>

印刷製本	プリンティングイン株式会社(PICO)
------	---------------------

---

(不許複製・転載を禁ずる)